

# 外部評価報告書

平成 20 年 6 月

宇都宮大学  
国際学部  
国際学研究科

## 刊行にあたって

平成 16（2004）年の法人化以降、国際学部、国際学研究科は中期計画の推進に邁進してきた。中期計画において、「卒業生や学外の識者等、外部からの評価を参照しつつ、教育の成果を検証する」という計画項目が記載されている。これを実施すべく、平成 18（2006）年 3 月に国際学研究科修士課程に限定して同窓会・有識者による外部評価を行っていただいた。その評価項目は以下の通りである。

研究科の教育理念・目的に基づき、1) 教育活動、2) 研究活動、3) 院生の進路、4) 社会との連携、5) 院生の教育研究施設・設備、である。評価の詳細については、国際学研究科 HP を参照していただくが、我々の努力が案外独りよがり、あるいは自画自賛に陥っていたこともよくわかり、改めて、「外部の目」が重要であることを認識できた。

この研究科評価を実施するにあたって、1999年設立以降の教育、研究、進路等の多様な活動について、評価委員の方々に下記に示した評価事項で評価をしていただくよう依頼した。そのため事前に資料の検討、そして私ども教員側との対面による質疑応答、報告書の作成というスケジュールをこなしていくことは、多忙な委員の皆様にとって大きな負担となることが理解された。

### <参考：平成18年度外部評価>

#### I. 日 時

平成18年3月14日（火） 13時30分～17時30分

平成18年3月30日（火） 16時00分～18時00分

#### II. 評価の対象

- (1) 大学院教育理念・目的
- (2) 教育活動
- (3) 研究活動
  - ①教員の研究活動
  - ②院生の研究活動
- (4) 院生の進路（就職，進学）
- (5) 社会との連携
  - ①教員の社会との連携
  - ②院生の社会との連携
- (6) 院生の教育研究施設・設備

#### III. 評価の方法

- (1) 評価資料を外部評価委員へ事前送付し、資料の検討を依頼。
- (2) 委員が参集のうえで、上記評価の対象について評価・提言の発表。

(3) 主催者側と評価委員との質疑応答。

なお、評価の開催期日当日には、研究科長から下記の説明を行った。

(1) 国際学研究科の現状

(2) 改善の方針及び将来構想について

平成20年1月の教授会において、前回の反省の上に立って、同窓会・有識者懇談会（懇談会）を制度化し、評価委員の負担を減らすべく、20年度以降、毎年ないしは2年に一度この懇談会に評価事項を限定して外部評価をお願いすることで意見の一致を見た。これまでの経験及び国際学部、国際学研究科について熟知していることから、前回の4人の委員に懇談会委員を依頼した。今回の評価は学部と、研究科の教育課程と進路に限定し、それぞれ分担して評価していただくようお願いした。報告書についても、テープを起こし、それを訂正することで刊行することとした。これらの準備の下に平成20（2008）年3月28日に懇談会を開催した。

今回の報告書で指摘されている事項については、現中期計画内で実行できるものと次期中期計画に反映させるものとに区分し、委員の労苦に報いるべく実現に全力をあげたいと考えている。ここに、同窓会・有識者懇談会の委員の皆様に国際学部・国際学研究科の教職員を代表して厚く御礼を申し上げたい。

平成20（2008）年6月9日

国際学部・国際学研究科長 北 島 滋

## 外部評価委員名簿

吉 葉 恭 行	委員	(国際学部同窓会会長)
李 尚 珍	委員	(国際学部・国際学研究科修了)
土 屋 伸 夫	委員	(国際学研究科同窓会会長)
進 藤 一 幸	委員	(国際学研究科修了)

## 国際学部出席者

北 島 滋	(国際学部・国際学研究科長)
佐々木 史 郎	(国際社会学科長)
高 際 澄 雄	(国際文化学科長)
磯 谷 玲	(国際社会研究専攻主任)
中 村 祐 司	(教務委員長)
松 金 公 正	(広報委員長・学務委員)
柏 瀬 省 五	(司会・点検評価委員長)
井 澤 元 一	(国際学部事務長)

## 評価資料等

国際学部・国際学研究科中期目標の達成状況（平成20年1月）

国際学部概要

国際学研究科パンフレット

**COURSE CATALOG 2007**

宇都宮大学履修案内（国際学部）

履修ガイド（国際学部）

学生便覧（国際学研究科）

就職関係データ

## 同窓会・有識者による外部評価について

### I. 日時

平成 20 年 3 月 28 日 (金)

13 時 30 分～13 時 40 分

開会

学部長挨拶

外部評価委員の自己紹介

13 時 40 分～14 時 10 分

国際学部・国際学研究科中期計画の進捗状況の説明

14 時 10 分～16 時 30 分

今後の国際学部・国際学研究科の発展に関する提言  
閉会

### II. 評価の対象

- (1) 国際学部について
- (2) 国際学研究科について

### III. 評価テーマ

- (1) 国際学部・国際学研究科中期計画の進捗状況
- (2) 今後の国際学部・国際学研究科の発展に関する提言
  - ① 教育課程 (カリキュラム編成)
  - ② 進路「就職, 進学」
- (3) その他

## 平成 19 年度国際学部同窓会有識者懇談会

<司会>

それでは、定刻となりましたので、平成 19 年度の国際学部同窓会有識者懇談会を開催させていただきます。今日の日程でございますが、既にここにあります資料等に目を通していただいていると思いますので、説明は省略させていただきます。

まず、だいたい 13 時 40 分くらいからになります。30 分ほど、14 時 10 分くらいを見当に学部長のほうから国際学部及び国際学研究科の中期計画の進捗状況の報告を最初をお願い致します。そしてその後、14 時 10 分くらいから 16 時半くらいまでの約 1 時間 20 分くらいになります。その報告に基づきまして、国際学部および国際学研究科の将来の発展のための様々なご提言、ご意見等を伺いたいと思います。この間の休憩につきましては、様子を見ながら適度に取りさせていただきます。

また、開会の前に、一言ご了解をいただかなくてはいけないことがあります。それは、本日の発言内容につきましては、後ほど冊子にしてまとめたいと思っております。そういうことで、ご発言いただいた内容を、録音させていただきたいので、ご了解ください。

早速でございますが、開会にあたりまして、国際学部北島学部長からご挨拶をいただきます。よろしくお願い致します。

<北島学部長>

今日は年度末の大変お忙しい中、我々のお願いを聞いていただきまして、感謝とともに厚く御礼申し上げます。

今年、「同窓会有識者懇談会」を設けさせていただきましたが、実はもう 4 人の皆様には平成 18 年の 3 月だったと思っておりますが、中期計画に基づき、外部有識者として外部評価をしていただいております。毎年外部評価をやるというものもなかなか大変なものです。他方で、何年かおいてまた改めて外部評価をしていただくということになると、結局その間の資料が膨大になりまして、依頼された方もお忙しい中大変だということになりまして、過日の教授会で、そうであれば毎年「同窓会有識者懇談会」という形でご意見あるいはご提言をいただいたほうが、お引き受けいただけるのではないかとということで、制度化をさせていただきました。制度化して、18 年度既にやったのにまた私達かと言われるとちょっと申し訳ないのですけれども、前回大量の資料をお読みいただいたりして国際学部のことを良くご存知で、かつ国際学部および国際学研究科のご出身ということもあり、内部的にも国際学部のことに良く精通をしておられる皆様方に今回もお願いするのが筋ではないかとということで、企画させていただきました。一応 2 年程度をめぐりにお願いをするということで、これからまたいろいろご意見等を聞かせていただければと思います。今日は、忌憚のないご意見そしてご提言をいただければ、私どもがそれをすぐに実行できるかどうかは別として、もう既に次期の中期計画の策定をしなければいけませんので、そこにぜひ反映をさせたいと考えております。

今日はひとつよろしくお願いを致します。

<司会>

はい、ありがとうございました。

それでは早速会議に入りたいと思いますが、まず本日の出席者を紹介をさせていただきます。もうお互い良く知っていると思いますので、確認の意味で私のほうから順次紹介させていただくことに致します。

まず、平成19年度の委員の方を紹介させていただきます。平成11年の3月に卒業された吉葉恭行さんです。それに、平成13年の3月に修了致しました土屋伸夫さんです。同じく、平成13年の3月に修了致しました李尚珍さんです。それにもうひと方、平成13年3月に修了致しました進藤一幸さんです。先生方のほうをご紹介させていただきます。今ご挨拶いただきました、学部長の北島滋先生です。それに、国際社会学科の学科長であります佐々木史郎先生です。国際文化学科長の高際澄雄先生です。大学院のほうですが、国際交流研究の専攻主任であります磯谷玲先生です。それから、国際社会研究専攻主任および国際文化研究専攻の主任は所用で欠席されております。私が点検評価委員長として参加しております柏瀬でございます。それに、教務委員長として参加しておられます中村祐司先生です。それから今、所用で遅れておりますが、学務委員の松金公正先生が後ほど参加される予定です。以下、事務長の井澤さんです。次に、専門員の吉川さん。次に、係長の小川さん。それに岩城さん。以上です。よろしくお願い致します。

それでは、早速会議に入らせていただきますが、まずは学部長の方から、国際学部および国際学研究科の中期計画の進捗状況について、ご報告をお願い致します。

<北島学部長>

では、座ったままでお話をさせていただきます。

それでは、中期目標の達成状況ですが、実は奇数ページだけ送って偶数ページが欠けていたということを土屋会長から言われて急遽送ったということで、大変申し訳ないことを致しました。お詫びをさせていただきます。もう既に時間が遅れておりますので、私の方からそんなに細かくお話をするというのではなくて、大雑把に大体こんなことをしてきましたということをお話します。特に18年度の3月に前回外部評価という形でしていただきましたので、それ以降を中心にお話をさせていただければと思います。

今日、主にお願いしているのは、教育課程と進路です。研究の方面、地域貢献等についてはまた年度を変えてお願いできればというふうに考えております。今年は教育課程と進路ということで、それを中心にお話をさせていただきます。昨年、19年4月に国際学研究科国際学研究専攻、いわゆる博士後期課程の設置を何とか実現をして進めてきましたが、実は計画は文部科学省側にお認めをいただいたというか、設置審にお認めをいただいたのですが、なかなか具体的に進めるということになると、私どもは走りながら進めてきたというのが現状でございます。計画と現実との間にやはりかなりの溝がございます。そこら辺に大きなエネルギーを割いてきたということでございます。幸いに昨年は9名の受験者がございました。今年は受験者の1人が、京都大学の方に合格して、取られてしまったのですが、13名の方に受験していただきまして、7名の方を合格させました。まあ、やや多いのではないかとのご批判もありますが、これについては色々内部事情もございました。博士後期課程は一応今のところ表面的には順調に進んでいます。しか

し、内部的には色々葛藤を起こしながら進めているというところではあります。

それからもう一つは、既に準備室という形で昨年の12月から動いておりますけれども、4月1日から「多文化公共圏センター」を立ち上げるということで、今準備を鋭意進めているところがございます。資料の中には、その件についてはあまり触れてはいなかったかと思いますが、この「多文化公共圏センター」の理念ということとはまた後でご質問があればご説明させていただきますが、研究と教育と地域貢献を、このセンターと学部、研究科とが連携しながら進めるということで立ち上げました。本部と言いましょるか学長の方からも、各学部はそれぞれみんな附属センターを持っているので、国際学部もそういうものを作ってみてはいかがかという強い要請がございました。そういうこともありましたので、私も元々こういうことについては考えてはいたのですが、ようやくこのたび実現の運びとなったということでございます。そこでは、一つは、渡邊先生を座長とする多文化公共圏研究。これはどちらかと言うと研究に力点を置いた部分です。もう一つは、外国人児童生徒の教育環境の改善ということで田巻先生を座長としたプロジェクトチーム。今大きくこの二つをセンターのプロジェクトとして、大学の重点プロジェクトとして、大学から研究費の支援を受けて進めているところがございます。ただ、色々自治体等々からも、こういうことをやっていただけないかとかという様々な要請はきておりますが、まだ準備室の段階でございますので、4月以降は正式にそういうものを動かして行きたいと検討しております。

多少イベント的な形で申してきましたが、実は平成20年度は、研究科設立10周年でございます。それから今申しました「多文化公共圏センター」を発足させるということで、私自身はお祭りは好きなのですが記念行事はあまり好きではありません。どうもエネルギーばかり費やして、みんな疲れが出てというようなことが多いものです。なるべくそういうところは避けて、国際シンポジウムということで、両団体と言いましょるか、センター設立と研究科発足10周年ということの両面で、国際シンポジウムを10月29日に開催します。私どもの成果と外部から招聘致しますパネリストの先生方と少し意見をぶつけ合ってみたいと思います。今日ご出席の委員の皆様方にも、ぜひご出席いただければということで現在準備しています。大きな出来事としては18年度3月以降、こういうことがありました。

あまり時間をとるといっても許されませんので、早速、教育課程、学部の教育課程について若干お話をさせていただきたいと思っております。皆様方の資料で申しますと7ページになります。コアカリキュラムの充実ということがタイトルで挙がっておりますけれども、現在、学部基礎科目については日々改善を進めているところがございます。(6)から(8)に書かれておりますが、基礎科目、つまり必修科目について少し改善を進めて参りました。現在、実は大学を囲むと言いましょるか学部も同じことなのですけれども、各大学、国立大学法人は人件費削減で毎年1%ずつ削減せよということで、国際学部は有り体に言いますと割当額2000万円、これを平成21年度3月までに削減せよということでございます。そうしますと、その後補充についてはなかなか難しいという状況です。そういう外部環境のほかに内部的には学部基礎科目を中心とした見直し作業を現在進めております。中村真教務副委員長を中心に進めております。昨日、全教員に対するアンケートの結果が各教員に配布されましたけれども、今回はそういう動きがあることだけ少しご報告をさせていただくということで止めておきたいと思っております。

それにもう一つは国際学部長としてのかねての懸案と言いましょるか、実は学部基礎科目の中



には、かなりの数の学部基礎科目が必修として置かれております。ページで申しますと、7 ページ、07 と書いたところがございますが、その上のところに学部基礎科目という形で、置かれております。国際学部として13年目を迎えるわけですが、まだ「国際学概論」とかそういう科目がありません。学生諸君にはそれなりのことを示唆できるようなものをということで、ワーキンググループを立ち上げて、評議員の渡邊先生を座長にして、できれば教科書というところある意味では体系化されるのですが、そこまでは望まないにしても宇都宮大学国際学部の「国際学」というもののアウトラインを提起できるような教科書を刊行していただければと現在検討していただいております。うまく行けば2, 3年後には刊行できることになるかと思っております。

入学試験については、後でご質問がございますればお話していきますが、今のところ増えたり減ったりで、名目倍率はいつも4倍以上いっております。今年は名目倍率でいくと4.4倍。去年は5.1倍。そういう状況でございます。ただ平成20年度の4月から、国立大学法人は定員に対する超過定員の制限が厳しくなって参りました。これはまあ私学連盟の方からねじ込まれたということもあるのですが、私学の方は少しでも規定をオーバーすると補助金等々に影響するのです。国立大学は何も無いのではないかとということで、国際学部は小規模学部で定員100名です。一応定員に対して20%を超えてはならない。ですから、収容定員は、編入学が3年生と4年生に10人ずつありますので、従って420人ですね。これの20%を超えてはならぬということです。84名までは超過して採っても良いけれど、それ以上採ったらちゃんと授業料を全部返ささいよ。お金で返すというペナルティーが科せられますので、今年から非常に厳しく入学者数を色々勘案しながら選抜してきたのでございますが、結果は大体順当なところでしょうか。ところで、今まで私費外国人留学生は「定員外」で採れていたのです。つまり、5人採ってもよし、1人採ってもよし、まあ0でも良いということだったのですが、今度は100名の中で計算をしなければいけませんので、私費外国人の方々も来年度から多分、募集要項では定員という形で人数も入れる形になるのではないかとこのふうには考えております。なかなか入口の所も難しくなっているということでございます。

それから、8 ページのところでは特に私の方から申すことは無いのですが、宇都宮大学では今、後でまたご質問があれば中村教務委員長の方からお話があるかと思っておりますが、私ども実は、お金を外部から獲るということで、GP、Good Practice の略なのですが、各国立大学、私立大学もみんなこれを提出してお金を獲ろうということで動いているのですが、要は私どもの教育について、こんなことをやっているぞというその実践をベースにしながら、より進めるためにはぜひご支援を、という形で文部科学省側からお金を獲るとするのが元々の趣旨ですけれども、私どもはこの間うまくはいきませんでした。GP を提出することによって私どもが実践してきた教育方法、内容について改めて反省をし、その特色を整理をしてきました。委員の皆様方のところで申しますと、先ほどの資料、06 で書かれた「学問へのアプローチ」のところを見ていただければよろしいかと思っておりますが、特色を付けるとすれば「参加型授業」というものにかかなり力点を置いてやってきました。つまり語学教育で言えば「インテンシブ・トレーニング」だとか、あるいは英語研修としてオーストラリアのカーティン工科大学に学生を連れて行くとかです。これはもう高際先生が毎年大変な苦勞を背負わされておりますけれども、そういう分野で言うと実践的なと言いましょか、そういう授業をかなり重視しながら、ここで申します目的は国際交流協力

の推進のための実践的能力を育てる授業体系の推進です。まあこれはもうちょっと国際交流というのを広く取っていただかないとちょっと、あまり狭く取るとまずいのですけれども、これらの研修と卒業研究とを結び付けて、ここに書かれております地球市民の人材養成をして行くということでこの間整理をさせてきたというのがこの図でございます。

それから、この間、「国際学インターンシップ」については、20年度を検討期間として21年度からもう少し改善していこうという動きで現在動いております。それから、9ページのところで、これは全学的なあるいは全国的な流れということで、成績評価、教育課程の一つの達成度ということで、GPAを平成20年度から導入をするということで、評価段階が一つ多くなりました。秀、優、良、可、不可。Grade Point Averageで良いのですよね。GPAを来年度から全学一斉に導入をして行くということで、私どももそれに対応していきます。

18年度からの大きな動きとしては、コアカリキュラムの漸次的な改善です。もう一つちょっと言い忘れましたが、9ページの上のほうに国際キャリア開発、先程の参加型授業ということで宇都宮大学として、国際交流、正式名で言うと、「国際キャリア合宿セミナー」を、実は大学主催でやっておりまして、その中心は友松先生とかあるいは高際先生、そしてさらには阪本先生という、私どもも協力して実施しています。

<高際教授>

今は重田先生です。

<北島学部長>

今は重田先生を送り込んで、中心になって動いてきたのですが、2泊3日の合宿ですので、私どもとしては、それを単位として生かそうということで、「国際キャリア開発」という授業科目名で単位を認定しているということでございます。

さて、学部としてはこのぐらいでございます。まだ色々ありますが一応そこまでにして、大学院は、前期課程は2004年度に国際交流研究専攻をスタートさせ、既に完成年度を終えて、市民レベルの国際交流を進めて行くという、そのための人材養成を進めて参りました。ただ、他の2専攻についての改善と言いましょかその見直しは、まだ十分進めていません。しかも2007年4月から博士後期課程がスタート致しましたので、今までの3専攻は博士前期課程という形になりますし、そして新しい博士後期課程とワンセットになりますので、完成年度まで前期課程も抜本的に変えるということではできませんので、そこら辺のところは多少問題かなということ。何か大きな問題が生じているということでは必ずしも無いのですが、教育課程の見直しはやはり進める必要があるということで、現時点はまだ不確定なのですが、先ほど言いましたGPと言うのがございまして、大学院と学部の両方で募集しておりますので、今、中村真座長に大学院教育のほうで提出をしてみてもどうかということで、ワーキングで作業を進めていただいております。それと併せて大学院教育の課程についても見直しがあれば良いかなと考えております。ただ、問題は入学されてきている方が、今年は定員30名ですが35名の方が入学を致しました。前期課程のほうですが。そのうちの7割が留学生ですので、言葉の問題も色々ありますけれどもやはり手間隙かけて丁寧に授業をして行かないとなかなかある一定のレベルの修士論文の作成までは難

しいかなというのが、最近の実感でございます。従って、入学してきている学生の質だとか性格に対応した教育の方法、内容のあり方を検討すべき時期にきていると考えております。12ページになりますけれども、前期課程で複数の指導体制を取り入れているのですが、ようやくうまく連動してきたと思います。まだ副指導になられた先生が遠慮するようなどころもございますので、そこら辺の相乗効果がまだ十分出ているとは言えないかもしれません。

それから、先ほど申しましたように来年の4月から国際学部は教員が35人体制になります。そうすると、学部・前期課程・後期課程、それでセンターだということになりますと、負担問題がやっぱりどうしても出て参ります。今のところ留学生センターの先生方の全面協力を博士課程のほうも得ておりますけれども、そこら辺のところをどういうふうに見直していくのかということが大きな課題になっております。

教育課程、大学院もそれから学部のほうもまた後でご質問等々があれば、中村教務委員長のほうからご回答を頂くことにします。それではもう一つ、進路のところでは委員の皆様のお手元に、こういう2枚ものの資料がありますでしょう。前回、実は厳しく指摘されたところでした。外部評価の際に、進路の統計を掴んでいないということで厳しくご指摘されました。この資料は法人評価で今年の6月に出さなければいけない評価の資料を一部、委員の皆様方、それから先生方にお配りさせていただきました。これで見ただけならばと思いますが、学部のほうにつきましては、大体昨年でも90%超、今年もほぼ90%は超えているように思います。先ほど3月1日の段階では90%なのですが、その後、進路も決まった方が出てきておりますので、92~93%ではないかと思えます。ただし今年も留年が学部で60人。毎年50~60人なのですが、積極留年というふうにお考え頂ければ良いかと思えます。留学が多くてですね、その方々が9月で修了する方も割といるのですが、1年間延ばそうという方も多ございまして、一応90%超でお考え頂ければ良いと思えます。平成19年度も同様です。

進学はですね、今年は9プラス1かな。プラス1というのは、学部を退学された方が大学院に入ったという方がいました。それを入れると10人でしょうか、学部のほうは。それで、大学院の就職のほうも元々職業に就いておられる方も多ございますので、70~80%くらいかな。80%は行っていると思えますが、そんなに就職率が悪いということではございません。進学者は大学院の前期課程のほうから国際学研究科の博士課程のほうには5人かな。それに、先ほど申しましたプラス1が京都大学に合格されましたので、もう1人昨年修了した方で東大のほうにお受かりになられた方もおります。まあこれは、統計が昨年の方に入りますので、全体で言うと進学者は6名。国際学研究科から言うと6名ということになります。就職先については、また松金先生が来られた時に色々ご説明をいただけるのではないかと思います。ちょっと時間が超過致しましたけれども、大体こんなところですよ。

<司会>

はい、ありがとうございました。それでは、今の報告につきまして、まずは委員の方からご質問という形で少し深めてみたいと思います。それに関連しながらまた他の先生方から補足も頂くというようなことで、要はこれが経過報告ですので、今年度実践してきた実態であるということです。時間の関係もありまして今の学部長の説明から洩れてしまった、落ちていることもあるか

もしもありませんので、それは後ほどまたご提案いただきたいと思います。ここで色々ご質問をいただけたらと思います。もう少し質問しやすくするために二段階に分けて、まず最初に学部のほうの部分とその次に大学院のほうの部分と、両方併せてというのも結構でございますが、まずは分かりやすく最初は学部のほうに関連してご質問がありましたら、特別に順序はありませんので気が付いた点からお願いできればと思います。特に、一応ご担当ということで、吉葉さんと李さんが学部のほうについて。まずは吉葉さんいかがでしょうか。

#### <吉葉委員>

今日はちょっと雨が降りまして、花粉症の私にとっては良いことなのですが、道が混み、遅れましてすみません。

国際学部のほうの教育課程と進路が今回のテーマということですが、まず一つ目、国際学というものの概念定義ですね、定義を確立しよう。これは国際学部に入学した当時から懸案事項として挙がると思うのですが、これがいよいよ明らかになっていくのかということと楽しみであります。それから、進路というと学部の場合、就職がメインになるかと思えます。学部卒業後の進路はとても大切です。後の自分のライフプランを展開させていくということ、どういった進路に進んで行くかが大切です。それからどういう学生が入ってくるのか、そしてどういう教育課程を経て、どのような進路に進んで行くかということを考えますと、教育課程も大切ですが、まず入口の部分で、どのような学生を受け入れるのかということがとても重要ではないかなと思います。アドミッションポリシーはどうなっているのかなと、私も少ない情報ながらウェブサイトを見たり、拝見したりしているのですが、一応書いてあるものは見まして、積極的にコミュニケーションをとっていきような人材であるかそういった内容だったと思うのですが、そのような学生に来て欲しいのだということには分かるのですが、今度、国際学部に入ったら何が勉強できて、どういうことができるのかなというのを調べる際に高校生受験者が見た時に必要な情報としてはあるのかなと思ったのです。ウェブサイトから見ると、先生方の研究内容というのは良く分かるのですが、拝見すると一応項目として並んでいて分かるのですが、国際学部のホームページから見ると、これはトップページなのですが、国際学部のページからですね。ここには、教官プロフィールと卒論と書いてあって、この教官プロフィールにリンクが張ってあっていくのですが、卒論というのはどこに行ったのかと、見あたらないのです。大学に入ったらどんな勉強ができるのだろう、最終的にはどういうことが研究できるのかなというのが見えない。卒論と張ってあるのに空振りしてしまったというのは、ちょっと残念だったなと思いました。

国際キャリア合宿セミナー、これが一つですね。あとぱっと思いつくことを並べていってしまうのですが、国際キャリア合宿セミナーを一つの単位として認定して積極的に展開してもらっているということはとても良いことだと思いますし、それに確か宇都宮大学の峰ファンドのほうから資金がある程度使われているという話ですね。大学との連絡協議会、同窓会との協議会で、これにも同窓会としても資金的にご支援申し上げたいなというふうに理事会のほうで討議しているところでもありますので、ぜひどんどん活用していただきたいと思います。

後はコマーシャルになってしまうのですが、今年からポルトガル語が、このトップペー

ジには掲載されておりありがたいのですが、ポルトガル語講座、講座というか語学が開設されるということで、ぜひこれも大学に入ってくる入学者あるいは受験者の数が増えるということに貢献できたらと思っています。とにかく、受験者が多いということは母数が増えるということで、それだけ優秀な人材を選びやすいということで、その後の教育のしやすさ、その後の進路への展開、就職率が上がるとか、安定していくのに繋がると思います。あとは入口というのも、今後も重きをおいて考えていくのは大切だと思います。ちょっと長くなりましたけれども、以上です。

<司会>

ありがとうございます。

質問というよりはご意見も既に出されているように思うのですが、それに関連して今触れられたことについてもう一遍それぞれのできるだけ近いところからちょっとお話をいただきましょう。例えば、一番最初はまずアドミッションポリシーに関連して、ちょっとご指摘があったと思います。学部長のほうからどうでしょうか。

<北島学部長>

そうですね。アドミッションポリシーについては、これは作った時から別に変えているわけではございませんけれども、受験者との関係ですよね。受験については、委員の皆様方もご存知だと思いますけれども、推薦入学とそれから前期日程、社会人、帰国子女、私費外国人が、学部では五つで良いのかな。確かそうだと思いますが、特に人気が高いのは、推薦入学は結構多ございます。その入試方法としては、集団面接方式を採用してございます。もっと詳しい方、その具体的な手法としてこのアドミッションポリシーと関連付けて先生方からちょっとご説明いただけますか。

<高際教授>

そうですね。李さんが留学生で入って来られたあの時が推薦の最初の形だったのですよね。1対1で、それで10分間色々聞いてみる。あの時は多分推薦も、留学生、私費外国人留学生も同じだったと思うのですけれども。これは3年前ですね。とにかく、答えが段々と何と言うかみんな用意して、それで非常に似たような、例えば中国で食品の技術というか食品問題があると、半分以上がそれに言及するとか。そんなようなことになってしまったので、もうそういう用意された返答というのはまずいのではないかということで、今は5人のグループを作るようにしました。そして20分間課題の文章を読ませて、それについて議論させるというやり方を採っています。これは柏瀬先生が始められたのですけれども、それに関して最初1回ずつ回すのですよね。で、1分間でしたか2分間でしたか。そして、今度は自由な討論ですけれども、回数を限るのです。そして、今度は逆にまわして、まとめに入ると。この結果として受かる学生が違ってきている。要するに、提示された問題を適切に捉えて他の学生の意見も聞きながら自分の意見を言えるという学生が来るということになるという方式を採って、今までのように教員と学生との1対1のやり方とはかなり異なると思います。ただし、問題もありまして、議論がある学生の発言で変な方向に引っ張られちゃうことがあるのです。そうするとその問題から離れちゃうのですよ。そうすると、全体

がグループとしてはずれちゃって、グループごと落ちたりとか、そういうようなこともあるので、そこをどうしようかと。討論には教員は参加しない。それから司会の教員も発言が許されないということで、そうすると気付く学生がいればいいのですけれども、気付かずに盛り上がって「良かった！」という感じで終わって、結果は落ちていたという、そういうこともあり得るので、こういうことをどうしようか検討しています。良くなったとは思っているのですけれども、まだ完全ではないというようなどころがあると思います。

#### <吉葉委員>

今のことに関連した質問をしてよろしいでしょうか。入口と出口という意味ですが、推薦で入った方、正規の試験を受けて入った方、それから他に AO 入試はまだ採用されていないのですよね。その後研究されて、どういうふうな卒業をされる、進学されるということが展開されていたのかということまで、追跡調査をしているのかというのが私、前回の評価の時に申し上げた内容だということ思い出したので、今もう一度質問させていただきます。

#### <北島学部長>

追跡調査は後期日程廃止の時には、前期日程と後期日程で入った方々の成績はどうかということで追跡調査をして後期日程をやめたという、その限りでの追跡調査はあるのですが、その入口から出口までの追跡調査についてはしていないということです。例えば、皆さんが入って来る時は国際分野で活躍したいということなのですが、ではどの分野でということになると、例えばそれは NGO だ、国際何とか財団だということになると、ほとんどこういう職には転職組で入っていくので、その最初のほうで入るということは非常に難しいのです。4月1日採用組というのがあまりこういう職では無いものですから、ただ数としてはかなり、この小規模の学部では、国際 NGO あるいは国際教育財団等々含めて、JETRO も含めてですね、かなりの数が転職組で入っているとは言えると思います。ただ、その程度のことしか言えない。それからもう一つは、転職組では、今のところ2名は外務省のほうに採用されて入ってはおります。ですから、一応各中央省庁には財務省も含めて一応入ってはいる。今年、県庁によろしく入りました、栃木県庁に。転職組を入れると、栃木銀行からの転職組を入れると今年は2名です。今年の卒業生で言うと、入ったのは1名です。ちょっと多様すぎて何とも言えないのですが、相変わらずその時の好況不況にもよりますが、観光と言いましょか HIS とか JTB だとかというところは、相変わらず私どものほうは強いと言うか、入っている方は多うございます。それから、製造業が見直されてきて、製造業の大手手は、やはり国際分野の取引がございまして、ようやくそこら辺の認識が出てきて、製造業が今伸びてきているという就職模様です。ちょっとそこら辺のところしかまだ説明できないというところで、誠に申し訳ないのですが、課題は解決されていないという告白でございます。

#### <高際教授>

ちょっと逆に質問して良いですか。今ですね、吉葉さんのところで、ある程度入口のところで明確にしてというふうにおっしゃいましたが、確かに、高校訪問をすると先生方にそれを言われ

るのです。国際学部というのは非常に曖昧だと、学生達に説明するのが。ところが学生達はその曖昧さが良いというか、何となくぼやっと国際系のことに従事したいということで、かなり国際学部に関してはそういうところが逆に選択性に合っているというふうに思っているのです。アドミッションポリシー、5 ページに 5 つありますけれども、私は例えば高校に行った時に、この 2 番の「世界の文化に興味を持ち多様な文化の共生を望んでいる人」、これぐらいでそういう人がいたら来て下さいぐらいに言うのですけれども、これはまずいのですかね。要するに、私は入ってから決めていくというのが良いのではないかなというふうに思っているのですけれども、これは高校の先生方には非常に不評なのです。だけど、今までやってきた感じでは、こうした中で勉強しながら選んでいくということが良いのではないかなと。そして、今も日本の職業で国際的なことに関係しない企業は無いと言っていいくらいあるので、例えば 2 年生の後半から 3 年くらいで標準を合わせていくというのは良いのではないかなと。そして今ですね、吉葉さんや李さんがいらっしゃる頃というのは、ちょっとまだ進路指導がね、めちゃくちゃで、本当に学生任せだったのですけれども、今は若い先生方が頑張っておっしゃって、例えば先輩を呼んだり、それから企業の方を呼んだりして、かなりそこら辺の指導がうまくいっているのではないかと、うまい方向にしているのではないかなと、思っているのだけれども、高校の先生からはそう言われる。吉葉さんからもそう言われたということで、具体的な考えをお聞かせ下さい。

#### <吉葉委員>

吉葉です。発言します。アドミッションポリシーという言葉を出したものの自体は、それ程否定的な意味で出したわけではなくて、国際学部と興味を引いた受験生がウェブサイトを見た時に、先生方はどういう研究をして学生は何を勉強しているのというのがもう少し分かりやすく、その分かりやすくする具体例として卒論のテーマ等だけでも並んでいると分かりやすいのになあと思った次第です。説明がうまくできなくてすみません。しかも、このウェブサイトに、教官プロフィールと卒論というタイトルが目についたものですから。それだけです。

概ね、その受験生には入口で国際学という、ぱっと見た目は曖昧さが良いというのは分かったのですけれども、その入試制度の中で推薦の枠をどんどん広げているというお話もありました。広げるという意味は、推薦入試で入ってきた学生のほうが比較的優秀だと受け止められているからだと思うのですけれども、その方達その後どのような展開をされているのかという調査も一方では必要ではないかと思えます。その概ね優秀だというのは学内にいる限りで先生方がそう感じてらっしゃるのであって、卒業した後に企業で優秀だと認められるのか、進路先で、進学先で優秀と認められるのか、そういった調査も必要ではないかと思っています。

#### <司会>

分かりました。松金先生が来られたので、これから先生をお願いします。

#### <北島学部長>

ちょっと司会のほうから、先ほどウェブサイトの件があまりどうもうまくできていないということで、現在どういうふうに進めているかを松金先生の方からご説明いただければと。

#### <司会>

松金先生は広報関係にも大変熱心にやって下さっていて、本日は学務委員としてご出席いただいていますけれども、今話題になったのは、学生がここに入って来るについてウェブサイトで良く見て入って来るわけですけれども、その時にアドミッションポリシーが書いてあって、あと先生方の研究領域等は良く載っているのだけれども、学生はどういう勉強することになるのか、将来どういうふうになるのかということについての案内がちょっと見えにくいのではないかなというご意見があったのですが。

#### <松金准教授>

遅れまして申し訳ありません。松金です。

私は今年度部内広報委員会委員長なのですが、本日ここに参加させていただいているのは、学務委員の中でキャリア教育・就職支援センターというセンターの協力教員になっておりまして就職関係に携わっているからだと思っておりますが、広報関係についてまずご質問がありましたので答えさせていただきます。

まず、ウェブが少し高校生に対して不十分ではないかということに関しましては、実は一昨年度から広報委員会の方では検討を始めまして徐々に更新をしております。ただ更新の速度が、これは機器等の入れ替え等の問題、それから入力者の手配の問題等がありまして、理想的に進んでいるとは言えない状況であるというのは確かであるかとは思いますが。しかし、先ほどの吉葉氏の質問から想像しますに、本ウェブページの教員の情報のところをご覧になっていただけたというふうに理解しているのですが、現在までに行ったホームページの更新としましては、例えば、各研究室ごとの最近の卒業研究のテーマというのを3件から5件載せるということを去年度から行っております。ただ、これはまだ、全教員に行き渡ってはおりません。これはちょうど今年度の入れ替え作業をしておりますので、古い卒論を外してまだ入れ終わっていないところとか、空欄のままのところ、例えば今日見ると当然あるとは思いますが。しかし、4月の終わりくらいにはそれは一応卒論のタイトル等は各先生のところに貼りつくということになると思います。先生によってはご意見がございまして、内容までは必要なくてタイトルだけで良いのではないかという方もいますので、そういう方もいるとは思いますが、大体4月の終わりくらいをめぐって、その部分に関しては強化して行こうと考えております。それと併せて、実はこれは2月の教授会で議論された内容なのですが、現在、宇都宮大学は各学部ごとに高校生向けホームページというのを開発して、そしてそれを大学のトップページから入ることが出来るようにするという作業を行っております。今のところ出来上がっているのは工学部のみなのですが、国際学部もそれをやるというふうに今考えて進めておりまして、現在のところ各教務関係・学務関係・国際交流関係、そして入試関係等の代表者が集まってワーキンググループを作って、どういうホームページを作るのかということを検討し始めているところです。正確に言うと、検討し始めようとしているところです。4月に入りましたらそれを具体記に進め、オープンキャンパスの前ぐらいに何らかのめどをつけたいと思っております。

そのような機会にあたってまた、こういう貴重なご意見をいただく機会に、外から見ていただいた感想を皆さんにお寄せいただければ非常に助かると思っておりますが、工学部のほうは、



高校生向け以外に学部自体のホームページを別途開設しているのです。今回、それとは別に高校生向けホームページというのを開発したのです。そうしますと、そこで一番何が違うかと言いますと、高校生向けホームページには、分かりやすく非常に簡単な言葉で、例えば教員の研究であるとか研究室であるとか、それから将来どういう職業に就くのか、それからどういう学生生活を送っているのか、例えば先ほど指摘があった時間割などが貼ってあったりするわけです。それに対して、学部本体のホームページというのは、もっと学術的な例えば論文のタイトルが書いてあったり、今、どういう先進的な研究に参加しているのかというようなことが書いてあるわけです。国際学部のホームページの場合は、実は3年前の改革以来基本的に高校生向け、つまり外部に対して分かりやすくということをもットーにやってきました。ですから、例えば工学部のほうでは、これまで例えば教員全員の写真なんていうのはホームページで見ることができなくて、今でも全ては見ることはできないのですけれども、少なくとも国際学部の場合は、写真であるとか、それと一応学部の2年生や3年生が読んでも分かるような文章に修正したような形の文章をホームページの部分についても載せておりますので、そういうのをうまく組み合わせれば、少なくともどういう勉強ができるのか、それからどういうふうに勉強していくのかという部分に関しては、ある程度の情報公開が来年度中にはできるかと考えております。

ただ、一点その就職のことに关しましては、これは宇都宮大学には一昨年の2006年の12月からキャリア教育就職支援センターができておりますが、そちらのほうでも今ちょうど指摘のあった「出た後」つまり就職した後、彼らがどのように社会からもしくは会社から評価されているのかということ进行调查して行かなければいけないという議論がちょうど今起きております。それに関しても非常に強い意見としてあるわけなのですが、ただなかなか悩ましいところがありまして、それはどういうことかと言いますと、例えば個人情報に係わるような部分などを大学側がどのように把握しているのが適切なのかといったことをセンターのほうでも今検討しているところであろうかと思ひます。もちろん、努力目標として将来的にどういふ活躍をしているのかということ进行调查していくという方向性は保たれると思ひます。その第一歩としまして、現在、就職セミナー、これは多分既にどなたかからかお話があったと思ひのですけれども、学部生の就職に対するキャリア教育に対する支援としまして、国際学部で実施しているものです。それを年に2回開いております。8名ずつぐらい、欠席があった場合は7名以下ですが、卒業生の方にきていただいて話をさせていただいております。ですので、そこで例えば彼らに対して教員のほうから話を聞いたり、それから去年の場合は、どういふ状況なのかということをしてできれば文章にして、私どものほうに教員のほうに送って欲しいという要求はしておりますが、なかなか彼らも忙しいので、8人来て8人提出ということにはなっておりません。ただ、そういった形で彼らが働いた後どういふ感覚を持っているのか。それから、その際に今年度に関しましてはアンケートを行って、どういふふうに国際学部の教育が役に立ったのかという、そういう内容のアンケートも取っております。ただ如何せん、8人、8人で16人ですので数が少ないという部分は否めませんが、こういった形でこの学部で行われた教育がどのように彼らの就職活動に役に立っているのかということに関しては、調査を今後も継続して行こうというふうには私自身は考えております。大体そんなところでよろしいでしょうか。

<司会>

ありがとうございました。今の関連、ご質問のうちの中で、入学ポリシー、アドミッションポリシーで入って来て、その後の先が良く見えないという、今就職のところまでちょっと飛びましたが、在学中にどんな勉強をするか、どんな科目をやるのかというような案内ですかね、そんなのは要するにカリキュラムの紹介ということになるのだと思うのですけれども、そのあたりの関連で先ほど既に話題としては基礎科目等についての改善の今研究を非常に真剣にやっている最中であるということはお話ししてあったと思うのですが、その他の科目も含めて、そうですね、教務委員会の方の中村先生どうでしょうか。そのカリキュラムの高校生等に対する紹介、案内といったようなものについて。

<中村教授>

そうですね、先ほど北島先生の方から大体のところのお話がありましたし、ちょっと細かい話になるとどうなのだろう、折角来ていただいた方に我々が長々としゃべるよりもという部分もありますので、大きなところで私のあくまでも認識を述べたいと思います。博士課程の後期ができたことで、「多文化公共圏」ということを掲げたのですが、確立した「多文化公共圏」になるような学問的な分野があってやっているわけではなくて、先ほど北島先生がおっしゃいました走りながらというか、とにかくこれから模索していくということがあると思います。今も具体的に見直していくとか色々やっているのですけれども、一応大学院の前期後期をもっと貫くような形のことを学部の科目等々についても一つ明確に張っていく一つの芯みたいのがあれば、すごく良いというふうに考えているので、その点がすごく大切ですので、そこら辺のところは4月からできる多文化公共圏センターなんかの形もできてきますので、そこを皆さんと追求していくということです。

あとはちょっとお話がずれるのですけれども、先ほど高際先生が、おっしゃったことは僕も賛成で、すごく言葉は悪いのですけれども国際学自体ももちろん非常にテキストを始め追求するのですけれども、我々の強みというのはある意味では三十数人の中で皆が顔を向きあっているというのがあるのですね。他学部で百人くらいというところとちょっともう会議自体が、なかなか難しくなってくることもあります。しかもその我々のこの設立を見ますとはっきり言って何が何だか分からないという学部なのです。先生方も。ですからなかなか共通で皆さん一致団結して一つにまとまって、工学部とか農学系の研究室を思い浮かべてもらおうと分かるのですけれども、そうではなくて、ある程度個々が、先ほど吉葉さんも指摘なさったのですけれども、あと松金先生のほうからも広報も含めてですけれども、やっていることをオープンにしていってね、そして電子媒体も積極的に利用して、何かあそこ面白そうだなというところ、もちろんその芯は模索しつつですよ、そういうふうな方が良いのではないかと思います。おっしゃってくださることは直で学部に反映するのですよ。これが例えば人数の多い学部だったらそれは勝手に言っているのだろうというのが必ず出て来るのですけれども、直で受け止めて反映させていけると思います。ただ、ちょっと一例を挙げると先ほどの教務の仕事というのは本当に実はですね、地味な目立たない内輪の仕事が多いのですけれども、ちょっと短く言うと一例を挙げて今、編入生の単位認定の問題で一所懸命やるのですけれどもエネルギーを割かれているかなと。しかし、一旦編入生が入ってき

てこういった科目を取って傾向として入ってきた学生がいて、こういう単位認定ができるよみたいなことを、ある程度先ほどの電子発信が出来れば宣伝になると思いますよね。だからつくづくこの頃、言うは易く行うは難しなのですけれども、本当に内向きな一つ一つの、時間割表も本当だったら時間割表が月曜日からあるわけですよね。そこのところをクリックしたら各先生方のシラバスが出てきれば非常に見やすいのですけれども、とにかくこう外向きに発信して行くというのがすごく重要ではないかというように思いました。

<司会>

ありがとうございます。

それでは、もう少し進めてみたいと思いますので李さんの方からもし学部を中心に何かありましたらお話いただきたいと思うのですが。

<李委員>

李尚珍です。よろしくお願いします。私達が勉強していた頃に比べて、7 ページに学部基礎科目の専門外国語科目に、スペイン語とかロシア語とかかなり多くの外国語が開講されるようになって新入生も在生もすごく楽しみにしていると思います。私は今、本学で韓国語の非常勤講師をやらせていただいているのですが、学生の中には韓国語などは高校では全く勉強したことの無い科目で、非常に興味を持つ学生が多いです。高際先生や中村先生がおっしゃったように、漠然として国際学部に入ったのだけど、高校とは違う科目や授業体験の中で自分がやりたいことを見つけていく、特にそういう一つの例として韓国語があると思います。そして、冬ソナブームにも後押しされて、結構、今、韓国に興味を持っている学生が多いのですが、よく私に質問してくるのが、韓国に留学したいのですけれどもどうすれば良いですか、ということです。今、国際学部は釜山の釜慶大学校や、祥明大学校と姉妹校になっていると思うのですが、そういう情報がまだ学生には行き届いていないような気がします。留学したいけどどう情報を集めれば良いのか、どの先生に相談すれば良いのかが分からないようです。例えば留学のための説明会を開くとか、そういうことが難しければウェブサイトですぐ募集があることを知らせるとか、交換留学で行くと単位の取得が認められることとか、授業料の支払い方法とかの情報を在生のために発信することが必要ではないかなと最近感じています。

<司会>

はい、ありがとうございます。それに関しては、どなたか。

<松金准教授>

私は国際交流委員なので、現在、委員長が席を外していますので承知している範囲内で答えさせていただきます。

今のお話に関しては確かにそうだと思います。ただ、これはなかなか、やはり難しく、まず第一点目としまして、この交換留学についての説明会というのは、現在学生支援課のほうで行っております。それで、例えば前年度行かれた学生さんと呼んで話をしてもらったり、それからど

んなふうな制度なのかということもやっております。多分このような説明会は1回だけなのですが、それ以外にも随時学生支援課のほうに行けば説明を受けることはできるようになっております。なお、この説明会は以前から続けて行っております。ただ、それはどういうふうに通じているかという、掲示の通知なのです。掲示板への掲示で貼ってあるのです。それで、どういふふうな表現をしたらよろしいでしょうか、その説明会が終わった後に説明会に行った学生から他の学生たちが聞いて、初めて学生が説明会の存在を知るというケースも少なくありません。それは掲示を見ていない学生が悪いのですが、当然締め切りがある事柄ですので、締め切りが終わってからどうしたら良いのかと尋ねてくる学生が多いのも事実です。

即ちこの状況を考えますに、多分その掲示板における情報が周知されていない。つまり学生があまり掲示板を見ていないということなのだと思います。では、それをそのままウェブサイトにあげるのかということになると、これはなかなかうまく行くかどうか分かりませんし、それからもう一つの問題点は、学生はウェブもあまり見ていないようです。ですので、例えば他大学、特に私立大学等では、これは先ほどの就職の求人情報があったらどうするかということと同じなのですが、そういう説明会があった時に携帯メールで流したりしているわけです。しかし、多分これもまたなかなか、その学生の携帯のアドレスを誰が全部知っていて誰に流せて誰に流れないというようなことに関しても、すぐに簡単にできそうなのですけれども、なかなかこれは実は各委員会なんかでも議論はあるのだと思うのですが、すぐに実行するというのは難しいという気がします。ただ、今おっしゃった様に、ウェブサイトに例えば何月何日に説明会があるというような情報は、例えば **What New** だとかそういった場所に載せれば、少しは学生の役に立つのかなと思いますので、それはその方向で今後は考えたいと思っております。

それからあともう一つは、国際交流関係につきましては、前は留学生センターというところに国際交流課というのがありまして、そこで留学生センターのホームページがあったのですが、そこに色々な詳しいことが書いてあったのですけれども、しばらくの閉鎖されていた時期がありました。今どうかということ、昨日今日は確認してはいません。こういう質問になると思わなかったもので。ただ、しばらく閲覧できなかったはずなので、以前よりは学生が情報をそういった場所から得ることは難しい時期があったのではないかとは思っております。ただそれは全学に平等に流す情報ですので、またちょっと国際交流の委員長等とお話をして、できれば国際学部の学生達にちゃんとしていくということにしたいと思います。

念のためなのですが、こちらは今年度の学部パンフレットなのですが、今年これは多分今年ようやく初めてなのですけれども、この18ページのところに協定校紹介というのがありまして、これは前から写真が入ったり、色々な形で去年も一昨年もあるのですが、ホームページのURLが全て入っているというのは多分これが初回だと思うのです。これまでは大学全体のホームページもリンクがいく大学とリンクが飛ばない大学があったり、それから間違った全然別の大学に飛んでしまうようなのもあったのですが、そういった形で少しずつ整理をしています。ただ、多分もう少し詳しくウェブで単位交換ができるとか、どういうふうな相手が対応してくれるかというようなことを出していきたいと思っておりますし、現在もこちらの17ページをご覧いただければ良いのですが、留学体験談ということで先輩達の話というのはこういうふうにホームページのほうにも載せておりますので、それを毎年少しずつですけれども、行った方にはアンケート等をとっ

て同様の形で徐々に厚くしていこうと思います。

<司会>

はい、ありがとうございます。はい、李さんどうぞ。

<李氏>

これは、先生方が大変かもしれませんが、一つ提案として外国語を担当している非常勤講師に海外留学に関する情報をプリントなどで流していただければ、授業中に伝えることができると思います。私もそうだったのですが、掲示はなかなかこまめに見ようとしても見られない時もあるので、そういうふうにしていただければ質問された時に、少しは説明ができると思います。私は国際学部の卒業生で先輩なので、何か後輩の役に立ちたいという気持ちがあるのですが。

<高際教授>

確かにそうですね。学生にしてみれば非常勤の先生方も同じですからね。なるほどね。

<李委員>

そういう同じ感覚で質問してくるので、すごく大変かもしれないですけども。

<松金准教授>

それはとてもありがたい申し出かと思います。もちろん、そんなことまで非常勤の先生にお願いして良いのかどうかは検討すべきですが、ぜひ、お願いする方向で考えていきたいと思います。

<司会>

はい、ありがとうございます。

そのことに関連して、少し知っていることがあるのですが、例えば5、6年前までは私が実はそういう国際交流委員で、国際学部でやっていたことがあります。その時には留学相談窓口一覧という、どこどこ大学、協定校を全部挙げて、その相談は何々先生、例えば私はノースダコタ大学・柏瀬といったような、そういう相談の先生、そこに行って相談しなさいというような、中国の大学は松金先生というような名前を書いて、そういう表を作って新年度に渡す、学生に配るといったようなことを2回ぐらい、2年ぐらいやったことがあるのです。まあそれはそれで良いのですが、ただそれは国際学部の中でやった一つの行事というかやり方としてやったのです。ですが宇都宮大学は、そういう留学の募集は全学に平等にやるという理由で、全学平等の募集体制を取っているのです。国際学部が募集して選考して行く人を決めるというようなことではなく、全学の今は学生支援課で掲示を出して、そして全学に募集をかけて、そこで集まってきた者に順位を付けて、全学の選考委員会で決める。実際はほとんどの者が国際学部の学生が多いのですが、まあたまには教育学部の学生、あるいは工学部の学生というのも応募してきていて、その人も外さないでできるだけ組み込むようにして選考をしている。それが今年度は、全学のその学生支援課の事務と国際学部と各学部から出てきた希望とで付き合わせながらやっています。去

年度まではその間に留学生センターが入っていきまして、留学生センターの中にその事務局もありまして、ですから留学生センター主導で、中心で全学に募集もかけていた。留学生センターで作った選考の案を全学の委員会で確認して決めるという手順を取っていた。そうすると、要するに国際学部内の色々な情報のやりとりがすごく薄まってしまって、まあ言ってみると我関せずの状況にあるわけですね。事務局も無いし先生方も例えば私もノースダコタのことについて何か言おうと思うと、それは留学生センターでまだ募集かけていませんよとか、そのうち全学に出しますのどと、また聞いてみたらもうあれは決まっていますと言われてたりして、ちぐはぐなところがあってちょっと指導が非常に難しいというのがあるのです。具体的には、ですから、もう少し我々の側が実質的な指導のできる体制をちょっと作り直さないといけないのだと思います。

はい、どうぞ。進藤さん。

<進藤委員>

関連の件です。今、李さんのほうからのご発言に関係し、現在たまたま「日本事情」という授業を担当させていただいていますが、約 50 名の方々がいます。約半分が日本人学生、半分が留学生です。その席上で、常に私が今の留学のことにつきまして、特に日本人学生に対して、11 月の中旬の何日にはこういうのがあるから必ず出なさいというようなことの情報を流しています。その時にたまたま授業の時間と先ほどの全学を対象の説明会が少しダブル場合があるのですが、そういう場合はどうしても留学を希望をされている方はぜひそちらのほうに行きなさい、と。こちらの方の出席の扱いは考慮する、というような形でモチベーションを高めるようなことをしております。それに関連しまして、例えば今日のテーマとは関係無いのかもしれませんが、地元の高校への各先生方の出張あるいは北海道まで行かれたというような時に、やはり宇都宮大学の留学制度はどうなんだということを併せてその高校生、あるいは高校の先生方に説明していただくと、それはかなり波及効果が、2 段階 3 段階で出てくるのではないかなと思います。最後にもう一つ、実は私は野木町という小さな町の国際交流協会のボランティア活動を一所懸命やっているのですが、昨年の夏に国際理解講座の一環として「留学するにはどのようにしたら良いのか」というテーマで一般の町民から、中学生高校生まだが対象なのですが、そういう説明会を開きました。たまたま私は「交換留学について」を担当したのですが、体験したことも踏まえて、「交換留学制度」とはこういうものであるというようなことを中学生高校生に PR しました。栃木県内には市町村がらみの、国際交流協会が三十いくつあります。そこにもそういうことを PR するなど、色々な手段をとりながら一般の市民県民に PR されるのも良いのではないかと思います。

<司会>

はい、ありがとうございます。どうぞ。

<北島学部長>

今の進藤さんのお話で、多分私どもは 365 日分の 60 日以上を、実は各高校とかそういうところで、国際学部の説明をしております。その時には高校生諸君はやはり留学に非常に強い関心を

示している方が多いと思いますので、多分多くの先生方は留学についてはお話をするチャンスが多いのではないかと思います。それでですね、今一応ちょっと留学の方から離れてですね、先ほど李尚珍委員のほうから、たまたま朝鮮語を教えていただいているということで、実は今国際学部の先ほどの基礎科目の中で、この外国語、学部基礎科目の専門外国語がございますよね。この7ページで、これの見直しをどうするかということが一つございまして、もし委員の皆様方からご意見をいただければと思います。一応学部としての方の態勢は、多言語主義という今までの国際学部の伝統と言いましょか、単位数では6単位と4単位を2ヶ国語で充足させるということで、別に英語をとりなさいということではございません。だからここで朝鮮語で6単位をとって英語で4単位という形になるのですが、ただやがて35人体制ということで申しますと、人的資源という言葉はあまり良いとは思いませんけれども、例えば英語を中心にしてはどうなんだというふうなご意見も、学長を中心としたところからも強く出されてきております。私どもの意見としては、佐々木先生は他の用事で出ておりますが、佐々木先生の言を借りますと、初修外国語というのは、まあ関心を持たせてそして先ほどの留学に繋げてそこの外国語環境できちっとマスターしてくるという、そうでないとやはり初修外国語は、国際学部だけで読み書き会話というようなことは全て習得できるはずがない。英語もちろんそうなのですが。従って、私どもは今のところは体制としては多言語主義でいくのではないかと思います、いやそれではだめだとか、英語が国際共通語なのだからそこに力点を置いてはどうだというような意見もちろんあるわけで、そこら辺のご意見もお聞かせいただければありがたいのですが。

<司会>

今、これは学部長のほうから質問ですので、委員の方から何かありましたら。

<進藤委員>

それに関連するのは、パラツキー大学のケースが参考になるかと思います。チェコのパラツキー大学は国立ですが、必ず二つの外国語を専攻、これはヨーロッパ、EU 自体がそういう方針ではあるのですが、当然そのうちの一つは英語が当たり前ということになる。第二外国語は英語のレベルまではいかなくても、EU の国々とのコミュニケーションはとれるぐらいはマスターせよという方針で特にパラツキー大学は臨んでいます。向こうからの留学生はご承知かと思いますが、非常に語学的には堪能な方が来ています。そういう意味では、例えば、桜美林大学は、その外国語の数が17とか20外国語ぐらいが学べるということの一つの売りにしています。その外国語に対して国際学部の場合、今これを数えると9言語になっていますが、何と言っても英語は外せないのではないかと私は思っています。プラス1、英語プラス1ですね。

<司会>

はい、ありがとうございます。

他にこの外国語の科目、今の流れというか意見の中に、小さな10名以下の履修者のようなのはちょっと経済的に合わないから、そこのところを少し削って集中的に何かもっと効率の良い授業に整理した方が良いのではないかという意見があるという話なのです。けれども、国際学部と

しては、やはりいくつも外国語をとれるようにしておくというのが売りだから、それはしたくないのだという意見と、今大変議論の最中であるという、そういう状況なのです。

はい、どうぞお願いします。

<李委員>

そういう場合、外国語を卒論などに関連付けていく学生も多いですよ。例えば、韓国語で卒論を書きたいという場合や、日本語で書いても韓国語の文献を使ったり、フィールドワークを行ったりする場合はやはり必ず伴うものなので、進藤さんがおっしゃったように英語が主体であっても自分の専門科目と関連した外国語の科目がとれるような環境は必要ではないかと思います。

<司会>

はい、ありがとうございます。よろしいでしょうか。

<北島学部長>

先ほど柏瀬先生の方からお話がありましたが、やはり履修者が少ない、そうすると教育効率としても非効率、本当は教育効率からいうと良いのですが、経済効率から言うとあまりどうかというような意見もあって、そうすると例えば、ある履修者の多い言語のほうに、例えば非常勤の先生も採用してそこに人的資源を動員してはどうでしょうかというご意見も無いとは言えないのです。共通教育についても実はそういう中間監事監査のほうでも実は言われている。国際学部のために言語を限定してまで、つまり共通教育で英語以外の初修外国語を履修している方は、ほとんど国際学部だと言われていて、ちょっとそれもどうかということはありませんけれども。まあそんなようなこともございましたので、委員の皆様方からのご意見を伺いました。

<司会>

はい、どうぞ。

<吉葉委員>

現行についてはですね、多分予算的なものでもあったのだらうなという話は、私も感じてはいたのですが、留学のための協定校というのがございますよね。これは、この国のこの大学に留学ができる権利があると、まあそういう可能性があるということですよ。そういった大学に行く前の初修外国語として必ず必要であって何らかの形で学ぶ機会が無いといけないのではないかなというふうに思うのです。ということはこの中でそういう視点から見ると、必要無いものはロシア語で必要なものはモンゴル語。

<北島学部長>

ロシア語は必要です。ロシア語はイルクーツク国立言語大学と学部間協定を結んでおります。



<吉葉委員>

分かりました。

<北島学部長>

ちょっと小さく書いていますね。

<高際教授>

キューバ、ハバナ大学ですね。それから、キナン国際大学、イルクーツク、チチハル。

<吉葉委員>

そういえば、これだけの言語が必要だと。初修外国語としてですね。

<北島学部長>

残念ながら、個別ではシリアと協定を結びましたけれども、無いのです。アラビア語が開講されていない。もちろん、松尾先生がアラビア語をできるということなのですが、必ずしもアラビア語として開設はしていません。個別にやっていると思います。

<高際教授>

そうです。学生に教えておられますね。2コマ、個人的に。

<北島学部長>

既にもうシリアのダマスカス大学から4月に交換留学でお一人。こちらからも行くのですね。1年いけばアラビア語も上手になって帰ってくるとは思いますけれども。まあそういう状況です。

<吉葉委員>

そういう意味では多言語主義というのはよろしいのではないかと思います。予算の許す限り、と私は思います。

<司会>

はい、ありがとうございます。

今、2回目のお茶も出ましたから、ちょっと一休み入れましょうか。そして、その後一区切りしてもしよろしければ大学院のほうにいてですね、そしてまた両方併せた討論のためにもう少し時間を残していただいて、学部も大学院も併せた形で総合的にあるいは落ちたような項目がありましたら討論というようなことで、まずここでほんの少し2、3分、休憩ということにしましょう。

<休憩>

<司会>

それでは後半の部を始めましょう。

それではですね、学部の問題は色々あるとは思いますが、一応の区切りをつけまして、視点を、関連していたら当然一緒に結構でございますが、視点のポイントを、大学院のほうに移して、大学院のほうの教育課程あるいは進路といったことについて、アイデア等をお出しいただきたいと思えます。

それでは、土屋さんと進藤さんとに部分的にこちらをお願いしていたとは思いますが、まずは土屋さんから何かございましたらお願い致します。

<土屋委員>

同窓会の土屋です。

まず、最初に中期目標の3ページの大学院構築というところがあるかと思えますけれども、この博士後期課程が開設されたということ、まず私達修了生の悲願であったということも併せて、私達は重要な評価というふうに位置付けたいと思えます。今年、平成19年度も、聞くところによりますとOBとOGの方も何名か受験をされて落ちているようなこともあるらしいので、またそのことについてはまた色々情報をいただいて、これからの同窓会としてもアドバイスをしていけるような状況を考えていきたいというふうに考えています。博士課程入学者の中にたまたま放送大学の大学院の修士課程の卒業生が1名合格されたということで、私も放送大学とは個人的に科目等履修生の関係でかなり状況は把握しています。これについては、この資料の14ページにも地域との連携と言う意味でもこちらの国際学研究科としても今後重要な連携ができるというふうに位置付けられますので、この辺もある意味では放送大学の修了生が博士後期に入ってその重要な位置付けになっていくという、ちょっと楽しみと言うかそういう気持ちでいます。一つ確認なのですが、『学生便覧』の中で関係諸規程というところがあると思うのですが、その3ページに第8条の2というのがあります。パンフレットでは16単位という表記があるのですが、ここでは10単位というふうな表記になっています。これは恐らく誤りではないかなと思うのですが、この辺はいかがでしょうか。関係諸規程の3ページ、第8条に。これの後ろの方に関係諸規程というのがあります。

<北島学部長>

ああ、関係諸規程のね。

<土屋委員>

3ページ第8条に、ここに10単位という記述があります。国際学研究科の博士後期は16単位というふうにパンフレットでは表記されているのですけれども、ここが整合されていない理由は何かあるのでしょうか。10単位を超えていれば良いという。

<北島学部長>

違いますね。ちょっと待って下さい。博士後期課程のほうの5ページの表で行くと10単位には

ならないです。基盤研究で 2 単位，基礎演習が 2 単位で 4 単位。特別研究 1 が 1 単位で 5。それからリサーチ演習 7。臨地研究で 11。特別研究 2 で 13。そうですね，16 単位です。

<土屋委員>

これは間違いというふうに考えてよろしいのですか。では。

<北島学部長>

そうですね。

<土屋委員>

これは他の専攻のままになったのかな，10 単位というのは。

<井澤事務長>

卒業単位の I・II・III を抜くと 10 単位になるのですね。

<北島学部長>

ああ，そうか。卒業研究，論文指導。

<井澤事務長>

特別研究の I・II・III で 6 単位になる。今，土屋さんをご指摘になったのは，大学全体の学則ですよね。だから，そこもあるからということではないですか。

<土屋委員>

では一応これが 10 単位で，その研究を入れて 6 単位で，パンフレットどおり 16 単位となると。

<中村教授>

大学全体では 10 単位以上と，増やしているということです。余裕を持ってと。

<土屋委員>

では，それは私の解釈の間違いということですね。で，合わせたのを博士課程のところに 8 ページのほうに，まず 7 ページのほうに先生の担当のリストがあるかと思います。お二人，地球環境ガバナンスの中村洋一先生と知的財産権論の山村正明先生はちょっと存じ上げないのですけれども，恐らく他学研究科の先生という意味でしょうか。農学研究と工学研究。

<北島学部長>

そうですね。

<土屋委員>

これは、別に表記が無くても良いのでしょうか。他学研究科という。

<北島学部長>

中村洋一先生は教育学研究科の先生ですが、博士後期課程の専任としての扱いです。従って、兼担とかという表現はしてごさいません。それから知的財産権論の山村先生は、この方は学内の先生ですので、確かにこの方については兼担という形で良いのですが、ただ表記としてはしてありません。その辺のところの表記を細かくしていくと非常に複雑になりますので、左側の国際学基盤研究というのが書かれています。これは授業科目全体を指している、その中の細かく言うと、その中にグローバルガバナンスという授業科目群の中での各担当者がこういう授業科目を開講しておりますという表記の仕方です。従いまして、そこでは非常勤ですとかの表記はしてありませんので、ちょっと分かり辛かったかもしれません。

<土屋委員>

もう一つ、次のページの8ページからずっと科目の概要が書かれているのですが、ここで何々論、何々学、何々研究という扱いになるのですけれども、この根拠とか基準というのは何か統一されている見解というものはあるのでしょうか。

<北島学部長>

これについては統一的な基準はごさいません。一応、これは先生の専門分野ということで、その持っているこの科目、つまり国際学基盤研究の授業科目の中身をシラバスというふうまではいきませんが、授業概要をここで書きいただいたと。これも中身は全て設置審のほうに出している授業概要をそのまま転載してごさいます。よろしいでしょうか。

<土屋委員>

はい。それから、4ページのところに博士論文の研究プロセス管理という記述があります。ここで最後の方にレフリー付き学会誌へ投稿論文という記述がありますが、一応口頭では聞いたことがあります。1本というふうに。ここではあえて本数については書かれていないようですけれども。

<北島学部長>

これにつきましては、1本ということをごさいます。最低限1本ということ記載はしてありませんが、1本ということをごさいます。ここは厳密に言うと学会誌へということ、一応それで今2年生の方が来年の3月までに掲載受理をしていただかないと、予備論文審査、本論文審査へといかないということになります。予備論文審査の段階ではまだ受理が明確でなくても良いのですが、本論文審査になってくるともうそこでは受理されましたという証明書が無いとだめだということになると思います。

<土屋委員>

あと成績評価について達成度評価法というようなちょっと書き方があったと思うのですが、どんな内容かというのをもし分かっている範囲で教えていただければと思います。

<司会>

中村先生。磯谷先生。

<土屋委員>

成績評価という記述のところがあります。そこで達成度評価法という言葉が出てきているのですけれども、何ページかな。

<北島学部長>

13 ページでしょうか。これの中期目標達成状況の 13 ページです。

<土屋委員>

そうです。13 ページです。

<司会>

それでは、大学院の成績ということで、お答えいただきましょうか。

<北島学部長>

この議論については司会もやったということの経緯もありますので、大学院のですね、これは前期課程のほうになります。結論で言いますとここにも書かれているように、GPA の大学院への達成度評価については現時点では困難ではないかということでございます。それは、その理由としてはやはり、非常に少人数で絶えず議論をして、ここに書かれております(2)でしょうか。プレゼンテーションあるいはレポートとかという形で色々やっておりますので、そうするとそれを達成度という形で、学部のようなやり方では進まないのではないかと。ちょっと今のところ入れてははないということでございます。ただ将来、議論がまた新たに出てきてということになればまた別だと思いますが、現時点では結論的には以上のようなことです。

<土屋委員>

これに関してちょっと私なりに修士論文の評価というのを昨年度と今年の修士論文とを昨日簡単に資料を作ってみました。これはちょっと物理的なページ数という判断しか判断材料が無いのですけれども、例えば昨年度 27 名の修士論文提出がありました。各専攻トータルで 1,783 ページが出ています。平均にすると 66 ページということになるのですけれども。社会のほうにいたっては 728 ページの 12 名で 60.67 ページ。それから文化では 537 ページの 7 名で 76.71 ページ。交流では 518 ページの 8 名で 64.75 ページというような数値が参考数値と出てきています。それを今年の大学院生の 33 名の総ページが 2,607 ページ。これを割りますと 79 ページということで、

前年度対比で言うと 20%アップということで、確かに今年の論文はかなり力作が出ていると言え、ばそういうことになります。ただ細かく見ていくと、限られた時間で見たので熟読していませんのでその評価というのは難しいのですけれども、単純に全体として傾向を見る場合には、これも一つの指標になり得るかなと、今見ました。ちなみに今年の社会のほうは 848 ページの 11 名で 77.09 これは前年度比で 27%アップしています。文化では 793 ページ 12 名で 66.08。こちらは 14%のダウンになっています。それから交流では 966 ページの 10 名で 96.60 ページ。こちらは前年度比 49%アップということで、かなり交流のほうが顕著に健闘している内容に読み取れるかと思えます。ただ、昨年のところは私は個人的にメモを作っていますので、それを見ると文化の方でかなり内容の良い論文があったというところがありました。ですから、一概にページ数だけで評価というのは難しいですけれども、統計的に全体を知る意味ではこういったものも一つ手掛かりになるかなというのを単にやってみただけで、目安に今ご報告してみました。

それからもう一点、こちらの報告書の中に社会人や留学生を積極的に受け入れるという、これは少子化対策も併せて重要なことだと思えるのですが、先ほど留学生の比率がこちらの報告書で 49%、場合によっては 70%というような指摘があったかと思えます。国際学研究科の場合は一般・社会人・留学生という 3 つのバランスがあると思うのですが、これもある程度逆転してしまうとかなり授業を進めて行く上で、研究指導して行く上で、ある程度かなり懸念材料ではないかなという私見がありますので、概算では一般 20%、社会人 40%、留学生 40%とか、社会人 30%マキシマムで留学生は 50%ぐらいがバランス的な比率ではないかなと直感で感じるのですが、この辺の判断材料というのはご検討されているのでしょうか。

<司会>

それでは磯谷先生、この辺りの大学院のことで、最新のお話、比率の話ですね。外国人、社会人、通常の学生の比率と言いましょ、うか、学生さんについて。ちょっとお話いただけるでしょうか。感想も含めてで結構です。

<磯谷教授>

ご質問にまずお答えすると、特に検討はしていないと思えます。ただ、ご指摘のように留学生のウェイト、特に日本語能力が十分でない学生もいますので、授業なり論文指導に支障がある、あるいは困難が増すという感想は教員間ではある程度あるかなというふうには思えます。こういう場ですので、確認というか逆にお聞きしたいのは、今直感的なこと、ということでいくつか数字を挙げられたのですが、従来は研究科の留学生は絶対数での特定での基準はあるわけですが、一般とか社会人とかというそれぞれに上限があるわけではなくて、あくまで専攻ごとの入学定員と試験の成績ということで判断をしてきたわけですが、受験の態様ごとの上限というものも考えた方がよいというご指摘ですか。

<土屋委員>

逆にクラスマネジメント的な雰囲気、で言うと、そのほうがまとまっていくのかなという気がする、ですね。それで、同窓会の立場で後輩達の動きを見てみると、まとまっている年、まとまって

いない年はなかなか連携がいかない。今年の修士発表会の後も懇親会が設定されないということがあったことも踏まえて、こういうところがある程度指導する必要があるのではないかなというふう感じたところで、この点を指摘しました。

<磯谷教授>

これは多分、私が検討するとかしないとかというのをお答えする筋合いではないので、そのお答えは学部長とか研究科長のほうからお答えいただくほうが適当だと思いますけれども、そういうご指摘いただいたような問題があるということは、教員間ではある程度感じているところではあります。

<北島学部長>

ちなみに今年度3月25日に修了した方と、昨年度9月に修了した方を合わせると36名で留学生が36分の19ですので、約53%ですね。留学生の今回の修了生の割合は。

<司会>

関連として、はいどうぞ。

<李委員>

私が学部に入學した時は、私費外国人留学生は日本語能力試験の1級を取っているということが条件でした。大学院入試の時は、日本の学部を卒業した私費外国人留学生は日本人と同じ扱いということだったのですが、私の時は外部からの外国人留学生の新入生がいなかったもので、別のケースはなく、みなそのまま上がったと思います。他の大学を見ると日本で学部を卒業した私費外国人留学生と母国で学部を卒業して留学する学生とは選考が別になることもあります。入試の内容も違ってくるし選考の基準も違います。結局、入学しても一番苦労するのは本人だと思うのです。日本語ができないと論文が書けない、授業が分からないということが一番問題になってくると思いますので。実際、後輩から聞いてもやはり自分で論文をまとめていくのは一番大変だと。論文というのは自分が一番良く分かっている内容じゃないですか。こう言いたいんだけど、うまく表現できない、適切な言い方が良く分からない。言葉というのは外国人留学生にとってはすごく大事な問題だと思います。

<司会>

外国人の入学者の指導あるいは受け入れについてということですね。お話いただきましょうか。やはり学部、専攻科長。

その前に佐々木先生から卒業論文、修士論文等のページ数で若干のボリュームのお話がありました。論文全体の質とかですね、その出来具合等についての感想を先生からお話しいただきませんか。

<佐々木教授>

先ほどの数字をいただいたのは、本文ということですか。

<土屋委員>

厳密にはものによっては参考文献まで入っているページもあるし、ですからそこは今後の、これをもし一案でなく評価基準としてくるとすれば、それはそういうふうには本文のみというふうな拾い方をして行かなければならないと思います。そこは佐々木先生が言われたように、誤差は出てくるかもしれませんがそれでも。

<佐々木教授>

この頃、かなり分厚いのが出てくるので見ると、後ろのほうは資料ページが多いのです。例えばアンケートの用紙が入っていたりするというのがありますので、実感として確かに厚くなってきてはいますが、中身は伴っていないという感じがします。この頃部内でも話題になっていますけれども、どこまでが自分の文章なのかということがはっきりしない書き方が結構あるので、資料の記述をそのまま写しちゃって、これがどこからかと明示されていないといった形もある。これは今後かなり学部段階からちゃんと指導しないと。剽窃を意図してやっている場合もあるし、そうでなくてこれが真面目な勉強なんだと思って書いてきている者もいるものですから、これはやはり自分の勉強の部分と研究論文の文体というのは、違うんだということは今後の課題だと思います。今のところは出てきた修士論文なり卒論というのは部内の教育資料だけでも、これが電子化されてどこかで公開されるなんていうのになった時に、危なっかしいということは結構あると思うのです。やはり論文というものは水準のある程度確保しておかないと、オープンにする時はあまり大手を振ってこれですよとは言いがたいものが含まれているような気がします。

<司会>

よろしいですか。ありがとうございます。

それではまた先ほどの話題に戻ります。外国人とか社会人とか、入学者の学生数の比率。このあたりをどう考えようかということで、研究科長。

<北島学部長>

先ほどのご指摘なかなか実は難しいところです。で、私どもとしてはこの方なら十分良質の修士論文を書いていただけるという方を、合格者の方をそうやって絞った。受験者を絞りたいという気持ちはやまやまですが、そうすると今、他の大学院との競合が非常に激しい。特に、大手準大手がです。準大手と言ったらどこかと言うとまあ筑波とかそういうところでしょう。大手は旧7帝大とでもしておきましょうか。そこら辺が、熊手でみんな持っていくような感じで合格をさせていく。まあ、博士課程も場合によってはそういうこともあると思いますが、そういう中で私どもは何とか定員を確保していく。で、僕らは定員を欠員しても実は良いというふうに考えれば、出来の良い方だけを合格させて育てて行くということをしたと思うのですよ。だけれども現状では、定員に対して9割を割ると、文部科学省側からペナルティーがかかるのです。つまり、お



金返せと言うか運営費交付金を返せということになるのです。前は 8 割だったのですが、今は 9 割ですかね、もう今年は。そうすると、27 人は絶対に入れないとだめなのです。そういうようなことで、残念ながら国際学部も研究科も色々努力をしているのですが、この 2 年ほど受験者数が少し少なくなってきております。微減状態で、片方で留学生の受験者が多くなってきております。もう一つ、留学生で大学院受験予備軍である研究生が非常に多くなってきております。その研究生は 100%留学生です。今年度辺りでも、総計すると 15、16 から 20 近くが研究生で来ていますので、我々としてはそこで一生懸命指導してその方々が我が国際学研究科にきていただくということで、うまく繋がってはいると思いますけれども、その中でも先ほど言いましたように他大学の大学院にも流れますので、私どもとしては痛し痒しと。学部のほうから大学院のほうに入ってもらえるということが一つは連続して良いと思うのですけれども、残念ながらかつてほどの勢いはございません。従ってどうしても他の大学の学生あるいは留学生を受験生として確保することを依存せざるを得ない。ちょっとそういう状況がある中で先ほどのご指摘なのですけれども、まあできの良い留学生を入れたいということがございます。協定校との関係でそれをどういうふうに、いわゆる渡日前入学とかですね、そういうことも考えなければいけないし、まだ実現はしていませんが、ベトナムとの関係で交流協定を一つ結ぼうかといった時には、ダブルディグリー、それも一つは考えると。つまり、優秀な方を修士課程に入れて、こちらでディグリーを出す、修士の称号を出す。で、向こうに戻ればそれがベトナムの大学の学位として認められるというやり方です。ベトナムは法律がちょっと変わっているそうです。そういうことも含めて、中国、実は寧波大学あたりは場合によってはそういう要請も、それからチチハルもそうかな。ですから将来的に優秀な留学生を入れていく。現時点ではまだそこまではなかなか到達していない。国際交流委員長もそこら辺のところで腐心しているというところでございます。

<司会>

ありがとうございました。他の先生方も関連でありますでしょうか。よろしいですか。

<高際教授>

はい、質問なんですけれども、良いですか。

<司会>

はい、どうぞ。

<高際教授>

今、李さんがおっしゃっていた留学生を二種類に分けて別の試験をするというやり方なのですが、それはあくまでも両方とも留学生であるということですか。

<李委員>

はい。そうです。

<高際教授>

それで、一つは本国から入学時に来る学生、もう一つは日本の大学を卒業して、日本人と同じ入学試験を受ける留学生ですね。

<李委員>

日本の学部を卒業した私費外国人留学生は日本人と同じような入試です。

<高際教授>

宇大はね。

<李委員>

はい、あ、他の大学でも、日本人と同じ試験を受けます。

<高際教授>

それはここも同じで、例えば、私費外国人留学生で国際学部を卒業した、そうすると今度はですね、受験は一般になっちゃうのですね、ここも。

<李委員>

はい。私費外国人留学生が学部の入試を受けて入学する時には、日本語能力試験 1 級の資格を持って入ります。大学院の修士に入学する学生にはそれが無いということを入試でどういうふうクリアして行くのかという問題があると思います。

<高際教授>

我々は、一応は面接をやるのです。そこである程度は判断できるということなのだけれども、確かに話せることと学術論、特に修士レベルの資料の日本語を読めるかどうか、あるいはそうした日本語が使えるかどうか、これは確かに別の問題なのです。だから、実は日本語を受ける学生が多いのです。難しいですし、かなり厳しいのです。

<佐々木教授>

留学生の水準の確保は結構難しく、社会人で学部に入って卒業して、院の入試でもういっぺん社会人の資格が使えるのでしょうか。

<井澤事務長>

使えます。

<佐々木教授>

留学生は使えないのですよ。そのところはどうかという気はするのです。社会人の資格で受けてくる場合と留学生で受けてくる場合とがあって試験の科目が違うのです。面接 1 本で受け

るというのと。受けやすさということではあるのかもしれないけれども、そこである程度選別が入るとちょっと難しいかなと。先ほど研究生のお話が出ましたけれども、研究生について、私はかなり懐疑的で、秋から来て翌年の秋の試験を受ける間にどの程度の指導がなされているのかと思う時があります。実際にそこのゼミに入れて発表もさせてという研究室もあれば、ほとんど在留資格があれば良いというだけのほったらかしみたいな所もあるので、9月に受けてもだめ、2月に受けてもだめと、その間にさっぱり進歩が無いような感じもあるので、もしそういったところを我々のところの入学者と考えるのであれば、研究生の指導というのが今後の課題かもしれないという気がします。せっかく来てくれているのに試験に受からないようなレベルで1年置いておくということはあまりうまい手ではないと思います。

<司会>

はい、ありがとうございました。では、どうぞ。

<吉葉委員>

今先生がおっしゃった話の中で社会人で学部卒業はそのまま社会人資格としてもう一度院を入試できる資格があるということなのですか、この国際学研究科は。私が受験した東北大学の国際文化研究科は、それは無かったです。学部卒として受験しろということでした。それはちょっと違って面白いなと思ったのですけれども、その制度がです。ついでに話せば、北島先生が大手とおっしゃられた東北大学なのですから、その中の私が修学した国際文化研究科は独立研究科で、大手の中の中小企業なのです。ですから大学の中での立場がそれほど強くない。評価もそれほど高くない。やはり、比較的留学生が多い。やはりその中で、ゼミの中で、講座の中で研究していく時に、日本語ができない留学生というのはそれがネックになって、本人も不幸ですけれども、一緒に同じ研究テーマで議論する時に、我々がその迷惑という言い方はすごく言葉が悪いのですが、同じ水準で議論できないというのは、日本人の学生の側からもデメリットが見られるというケースもありました。せっかく良い所にきているのにその日本語の理解のところでもボトルネックがあったりして、一緒に研究していてそういう場面がいくつかありました。やはり学部は日本語検定1級ですね。そちらのほうと比べると、宇都宮大学で留学生と一緒に議論していた時のほうがですね、時として高い水準の議論ができたという場面があったりするのですよ。だから「え、何なんだここは。」というような、一瞬そういうのも見られたりしたのです。その点の質的な確保は難しい状況なのだなど、大手と言われるところの中小企業はですね、とても大変だなというように感じておりました。

<司会>

ありがとうございました。

さらに、では進藤さん、大学院の観点から何かありましたらお願い致します。

<進藤委員>

今の技能資質をどういうふう育てるかという、かなり集中したように思いますが、若干今回

配っていただきました資料について、ちょっと細かい点、4つ5つくらい質問を、お聞きしたいと思います。あと、時間が許せば、今議論になっている、前提としての留学生、その内の交換留学生と本当の私費で来られた方、その辺の数字の確認も後ほどさせていただきたい。最後に、さらに時間があれば今日のもう一つのテーマである教育課程ともう一つ進路の問題。特に進路と言いますと、別な機会でも申し上げたのですけれども、留学生の方々の就職指導ということです。若干、今キャリアセンターのほうで目が向けられてきてはいますが、どうもこれだけ、50%になっていくことであれば、やはりこちらも少なくとも国際学部レベルでも、どうそれに対処して留学生に就職情報を提供し、あるいは企業とあるいは他の大学との連携とかなどが必要ではないかと思えます。最後に時間が残ればそちらのほうまで言及したいと思えます。

では、細かい点で恐縮なのですが、中期目標の達成状況、この資料の中での細かい点を質問したいと思います。まず10ページですが、真ん中程に、その(2)のほうですが、博士後期課程の入学試験方法について色々と改善点について検討し改善案を決定したとありますけれども、これは具体的にどんなことを取り上げられたのかを教えてくださいたいと思えます。

次に、同じページの2-(2)入学者49%なのですが、この49%というのは今回平成20年度でしょうか。それとも19年度の実績なのでしょう。

それから、同じページの一番最後の2行、(4)のところですが。英文カタログを作って、これは大変だったと思いますが、これを海外の交流協定校に配布し便宜を供したとありますけれども、せっかくこれだけのかなりご苦労されて配布されたものに対して、20校あるいは30校に配ったわけですね。協定校からの反応なり、これについての質問なりがあったのかどうか、お聞きしたいと思えます。

それと13ページ目に飛びます。13ページ目、上から二番目の(2)2行目、GTA導入は馴染まないとの議論があって、これは現行の方法を持続することとしたとあります。これは私はGPAの内容が分からないのでお聞きしたいのですが、馴染まないとの議論というのはどういう観点から馴染まないのか少しご説明をいただきたいと思えます。

それと同じところの2番、総合的達成度評価法の1については、先ほど土屋さんが触れられていましたので省略します。とりあえず以上です。

<司会>

はい、それについて、まず一つ一つお答えをいただきましょうか。研究科長からいきましょう。

<北島学部長>

はい、博士後期課程の入試の改善ですね。それについては、後でまた他の先生方からも補足していただければと思いますが、昨年度の入試方法でいわゆる現役の方はマスター論文が主になりますし、それから社会人の方はこれまでの研究等々の成果を出していただく。それと面接での、基本的に言うと3年間で博士論文を書けるだけの力量があるのかということと併せて総合評価で考えて参りました。それでもって少なくともある点数以上ということであれば、合格を決めてきたということがございます。ただ、実はなかなか難しい点がございまして、改善点として、ちょっと今日、今細かくデータは持ってきてございませぬけれども、今回面接とそれから総合評価で

いわゆる研究の評価をするにあたって、面接者が初年度は3人体制でやったのですが、そのところ、客観性担保ということで、もっと多面的に見た方が良いということで、5人体制で一人の受験生を見るということでやってみました。それが第一点目です。

もう一つは、ある先生につきたいということがございますね。これは各大学も同じなのですが、事前に希望者は担当していただく先生、指導教員となる可能性のある先生にあらかじめお会いをして色々研究上のお話を聞いていただくということがございますけれども、その先生に入っていないかどうかということが、初年度は必ずしも入っていない場合がございます。

<高際教授>

人数が多い時ね。

<北島学部長>

そうですね、それで今回は、必ず入っていただくということで進めて参りました。それともう一つは、そこで色々あるのですが、合議つまり5人による合議というものも新たに導入をしました。入試の場合はいろんなやり方があるかと思えますけれども、合議をしないでそのまま自分は何点だと思いうことで点数を入れて平均点で、我々が想定しているその点数に達した者については合格させていくというやり方が通常良く採られているところですが、我々としては合議でこの方をぜひ入れても良いといった時には合格点という形で入れる。もちろん、例えば、ある人はそれはそうだけれどもこの方については合格の最低点で点数をつけるということはある得るわけですね。入れたいと、どうしても入れたいと云う方は高得点を入れれば良いと、その平均でという形になるかと思えますが、そこら辺のところを大きく言えば三点ほど改善したということがございます。また新たに、実は改善しなければならぬところが出てきておりますが、19年度での入試ではそういうことをやりました。

それから、先ほどの英文カタログの件でございますけれども、反応ありやと言われたらですね、多分ですがアメリカから電話がかかってきた方についてはこの英文カタログを見て大学院の博士課程を受けたいという、実際には受けませんでしたけれども。それ以外はですね、やはりそれなりの反応はあると思えますけれども、国境を越えてすぐ受けにきたという方は必ずしもいませんでしたので、反応としては必ずしも明確ではないということです。それで、今年はちょっと機器の関係で、古い機器だったものですからパソコンが、それで先ほど松金先生がおっしゃっていましたが、更新をしました。その関係もあって、機器の更新をしましたので、2007のカタログ、英文カタログについては掲載する時期がちょっとずれましたものですから、そのところも反応が少し鈍かったかなということはございます。その程度しか今のところは申し上げることはできません。

<司会>

よろしいですか。聞かれているのがちょっと落ちたかなとも思うのですが、今、10ページのところですね。(2)のところですね、博士前期課程の入学者が49%が留学生であること、それは留学生特別選抜実施の成果が上がっているのだと書いてあるのはどんな意味でしょうかということ

ですね。

<北島学部長>

申し訳ありませんでした。これはですね、この49%は、かなり古い段階のもので、法人化以降の最初の段階か、16年か17年度の数字だと思います。もうその時点で設置審に出した時の、その時の文科省とのやり取りの中で留学生がどの程度いるんだといった時に計算した時には平成19年度ですから、17年度くらいの数字で既に49%が大学院の修士課程に在学していたということでございます。

<進藤委員>

在学者の率なのですね。

<北島学部長>

これはですね、入学者選抜方法のところに書かれておりますが、この49%は僕の記憶では、在学者がもう既に49%だというふうでなかったかなと。17年度ですよ、これね。

<進藤委員>

分かりました。

<北島学部長>

はい、多分そんな大きな間違いではないと思いますが、数字はこのとおりだと思います。

<司会>

そしてそれから、13ページ、2- (2) です。

<北島学部長>

13ページですね。これは、私の意見ではございませんが、先ほどもちょっとお話をしましたけれども、厳密に到達度ということで今までの伝統が残りすぎているというくらいは確かにあります。というのは、大学院で優、良、可、不可で、不可は付ける方はいると思いますが、そのあんまりひどいと。だけれど通常、優、良、可で必ずしも成績差をなかなか付けづらいということがあるのです。というのは毎週顔を合わせて、宿題を発表させプレゼンテーションさせ、そしてそこでは確かに上手い下手ということはあるかと思いますが、そういうものを総合させて先生方は多分評価をしているので、大方の議論としてその学部のような試験一本とかでやる場合の時と、なかなかそういう方法が取りづらいということはあるかと思いますが。アメリカのほうとか何とか詳しい方は、そんなことは無いのではないかというふうにおっしゃる方もいるかもしれません。FDとかあるいは研究科委員会での議論がこういう体制で傾いたというふうにご理解いただければよろしいかと思えます。先生方のほうからもちょっと補足していただければ。

<佐々木教授>

まだちゃんとやってはいないのですけれども、やはりこの GPA はある程度ものを言うというのは、数が相当いて点数の分布が正規の分布を示すのであればですね、このクラスのどの辺に位置するというのが付けやすいですけれども、3人とか2人の演習形式の授業の中、多少の優劣はついても、これがAなのかCなのかということは多分付いてこない。

<進藤委員>

ああ、そういう意味なのですね。

<司会>

良いですか。では、その先。

<進藤委員>

段々時間が無くなってきますが、後半のテーマで取り上げたいのは、数字の確認はまた別途にさせていただきます。時間の関係で端折りますが、特に私が一番心配しておりますのが、大学院生の方、学部生もそうだと思いますけれども、留学生の進路指導、いわゆる就職問題はどうかということで、この資料の24ページ、就職等進路状況についてです。これは昨年7月にまとめられた非常に今回は細かく、この資料は良くまとめられていると思います。私が心配と申し上げているのは22ページの表の1番目の国際学研究科で、コラムの3番目の就職全体というところを見ますと、就職希望者数Aの欄でですね、男性が8名に対して就職者数が3になっていて38%です。これをどう見るかというのが非常に私は気がかりです。その後も当然進路をはっきりさせたほうが良いのかと思いますけれども、こういうことに関係しまして、学部・大学院ともども、社会人並びに留学生をですね、積極的に受け入れるというのは今回の資料の中であちこち強調されているわけですが、その結果、留学生の数が特に院の場合は半分にするということになりますと、この進路の指導というのをもっと拍車をかけてやる必要があるのではないかなというふうに思います。というのは、先ほど日本語能力の問題が出ましたが、やはり本人達が迷うのです。自分の学力で日本で就職したいと思っても、日本語の運用能力が無ければ、はなから諦めるという点の一つ。それともう一つ具体的な事例を言いますと、自動車メーカーのマツダという会社が広島にあります。知り合いから入ってきた情報なのですが、わざわざ宇都宮で求人をしたいと。これは日本人に限らず、今マツダという会社は中国で二箇所、重慶という遠い所ですけれども、自動車工場を建てています。そうしますと、中国人の学生で両方をこなせる方、従ってですね、宇都宮まで来て就職のための説明会をしたいというようなことまで、そのマツダという自動車会社の中で出ているのだそうです。実際は来なかったのですが、そういうような企業が持っているニーズをやはりもっと積極的に拾い上げて、学生にフィードバックすべきではないのかという、一つの事例です。いずれにしても留学生はどんどん受け入れる、しかし進路はですね、自分達で開拓しなさいとなる。日本人学生の進路を今比率で90%まで上げるのが目的で、第一番ですけれども。そういう意味も分かるのですが、これで留学生も大事にする、もっと受け入れるということであれば、もっと大事にしたい。今、キャリアセンターではプランはあるので

すが後回しになっています。全体の先ほどの数字はまだ聞いていませんけれども、大体一割まで行っていないと思いますね。全学での留学生が、大体 7%くらいだと思います。そういう中で、やはり後回しになって良いのかなというようなのが私が今心配しているところです。

<司会>

そうですね、これは松金先生、お願いします。

<松金准教授>

まず、留学生の指導に関しましては、昨年度は一度、その留学生のみを対象とした就職指導会が学生支援課によって開かれています。それから、最近 3 日間に渡る企業説明会が実施されましたが、留学生にも周知するようという指示等は出ております。また、昨年のキャリアフェスティバルは何月でしたか。

<北島学部長>

10 月ぐらいですね。

<松金准教授>

10 月ですね。10 月に行われたキャリアフェスティバルでも留学生ということで、例えばそのことに絡んで留学生の卒業生等々を呼んで説明をしてもらい、要するにどういうふうな就職活動をしたのかとか、そういったこともやっております。もちろんパーセンテージの問題がありますので、もっと何回も何回もやるべきであるというご意見はもちろん確かにそうであろうかと思いませんし、現在そういう方向で進めていこうと考えていることは、あろうかと思いません。

それで、先に概要だけですが、ここの表に出ています平成 18 年度修了者の進路状況というのをもう少し詳しくお話しますと、未定者 7 不明者 2 とあるのですけれども、一番最後、22 ページの国際学研究科の最後の一番右にその他という欄がありますが、その他の右二つが未定者、不明者です。未定者というのが決まっていない、不明者というのは返事を出さなかったということで、これが合わせて 9 人いるわけですが、この 9 人はもちろん全部全てが留学生ではありません。

この 9 名のうち確か 3 名が日本人です。6 名が留学生になっています。平成 18 年度の修了者が 30 名おまして、30 名のうち留学生が 14 名。これは入学でどういう方法を使ったかは分かりませんが、国籍が日本ではない者が 14 名で、そのうち企業に就職した人が 5 名。大学で教えるポストに就いた者、これは本国ですけれども 1 名。それから帰国した者、帰国就職が 2 名。これは就職企業は分かっていません。1 名は分かっていますが、もう 1 名は分かっていません。それから研究生、科目等履修生、大学院進学、博士課程ですが、等が 3 名ということになっておまして、残りが未定、不明 3 名ということになります。ですので、実は帰国する人間が本当は日本で就職したかったのだけれどもそうでなくて帰国したのか、それとも元々帰国するつもりで帰国したのかというところにはまではなかなか話を及ぼすことはできないのですが、今お話しましたように全部で 14 名、14 名いるうちの 11 名までは何らかの形で進路を報告しかつ決まっているというふうに理解していただければよろしいかと思います。



それで、ここから先は数に基づかないことなのですからけれども、今お話したキャリアフェスティバルであるとか、それから就職セミナー等にやはり留学生も出て来るのですね。出て来る際にですね、やはり積極的に出て来る留学生の就職は決して悪くありません。そこでの一番大きな問題は、こういうことを私が話して良いのか良く分かりませんが、もちろんご参考までですが、やはり留学生のうちかなり中国人の留学生のパーセントが多いです。韓国人留学生の方ももちろんいますが、パーセント的に非常に中国人留学生の方が多い。この中国人留学生に対して色々な話を、例えば就職セミナーなんかの時に聞いてみると、やはり日本の就職の仕方が馴染まないのです、彼らに。

つまり、要するにマスターの1年の秋ぐらいから、もしくは冬からその次の年の4月の就職先、これはぜひ李委員にもお話を聞きたいのですけれども、他の国がどうなのかは良く分かりませんが、中国人留学生等は普通4月から働くのであれば12月。というのは翌4月からというような感覚でいるのですね。つまり、半年以上に及ぶ就職活動を耐え抜くというか、そういったものが能力なのかそれとも習慣なのかは分かりませんが、それを続けて行けばこれまでここ少なくとも2年間に関しましてはそれなりに就職していております。

ただやはり、ビックサイトまで電車賃をかけて行くことがちょっと金銭的に辛いとか、それから今お話したようにそういう場合はここで行われている説明会に来れば良いのですが、それに毎日スーツを着て通うということがなかなか難しいというような意見が出ているのも実際に、この点は多分今後例えば留学生に対して行うことができることとしては、日本の就職活動というのは基本的にこうなっているのだということ例えばマスターの1年の夏とか秋とかに、何か話すような機会というのを作るべきかもしれません。大学院の就職に関しましては留学生だけではなくて、日本人に関しても同様なことが見られる点もありますので、ぜひこういうふうにしたら良いというご意見があればお話いただければと思います。

それで今年度平成19年度の2月末の時点での結果というのがここにあるのですけれども、36名中確か19名が留学生だったかと思うのですが、19名の留学生のうち未定という形で出している人は3人です。実は日本人で未定と出しているのが3人いまして、日本人で不明が1人いますので、割合としては日本人の方が問題があるということになってしまうわけです。

けれども、ただ、ここでやはり大きな問題としましては、帰国するという形で出す留学生がいて帰国するというだけで企業名を書いていないので、決まって帰って働く人もいればそうではなくて決まらずに帰国するという方もいるのです。そのところは、今の調査方法では個人的に知っているというようなことが無い限りこちらのほうで把握するのはなかなか難しいということになるかと思えます。ですので、留学生の就職ということに関しましてはやはりキャリアセンターのほうでも力を入れてやってはいるのですけれども、そういうちょっと国の就職観の違いのようなことがありまして、学部からずっと上がってきている学生はキャリア教育の授業をとる機会もあるのですけれども、大学院生にはそういう授業がなかなか無いので、これからの課題で、おっしゃるとおりだと思います。以上です。

<司会>

はい、ありがとうございました。

時間も、予定の時間もそろそろきておりますので、新しい話題というのはこれからはちょっと難しいので、まとめということにさせていただこうかと思えます。せっかくだから、やはり委員の方々にもう一遍、一回りですね、簡単に言い残したこともありましたら、ちょっとご指摘いただくぐらいで、順番にもう一遍、一回りさせていただこうかと思えます。よろしくお願い致します。それでは吉葉さんから。

<吉葉委員>

はい。私が断片的に、思いつくままに質問させていただいた内容にはお答えいただきましてありがとうございます。

それで、ウェブ等を活用しての宣伝活動とか広報活動に関しては、私も高校生向けのサイトというのを、長らく気になって見ていて、工学部しか無いというふうな話も持ち出そうと思ったのですが、松金先生の方からですね、早速ご紹介いただきまして納得できましたのでありがとうございます。

もう一点、気になっていたのは、留学したいんだけどという学部生がいて、その方達が十分な情報を持っていないという話なのですが、あとタイミング的なものがあるという話で、タイミング的なものももちろん必要な情報なのですが、まずこのパンフレットなんかでも留学できますよという体験談がありますけれども、この中に例えばですね、モデルケースみたいなですね、時期的なタイムスケジュール、留学した人はこんな学年でこういう勉強をして、この時期にどの大学に行けるという告知があるから申告して手続きを踏んでいけばいいんだとかですね、そういった何か大雑把なタイムスケジュールがあったりすると具体的に各学生も検討していきやすいのかなという印象を受けました。議論の中で思った感想とかですかね、感想めいたものですが。

それから、学部ではない研究科のほうなのですが、先ほども言いました質の確保という意味では、どの大学でも今定員確保というのはとても深刻な問題としてあって、その中に定員を確保しながら質も確保して行くのかということが課題としてありますので、ぜひその辺は頑張ってくださいという言い方しかできないのですが、私の対案も無いのですが、私に頑張ってください。以上です。

<司会>

はい、ありがとうございました。それでは李さんお願い致します。

<李委員>

私はまず、進藤さんがおっしゃったように、外国人留学生のケアも大事なのですが、日本の学生が海外へ留学したいということもよく考えていただければと思います。そして、もう一つは大学院の研究科のことなのですが、個人的な経験から言いますと学会に論文を発表しないと博論を出す時にかなり難しいこともありますし、またいきなり学会発表と言うとかなり大変なこともありますので、学内で最低一度研究論文を発表する場を与えて、学外や学会へと発表の場を広げる、そのステップが踏める形を作ってくださいれば、学会に出ていろんな指摘や批判を受けてやる気をな

くすようなショックを受けるよりは、徐々に慣れていく形でやっていけば良いかなと思います。前いただいた資料の中に論集がありましたが、国際学部の研究論集。その論集に学生はまだ投稿できないですね。できれば先生との共同研究などやゼミなどの協力で博士後期課程の学生が論文を発表することができれば、研究活動に少し慣れていく機会となるのではないかなと個人的に思います。

<司会>

はい、ありがとうございました。それでは次に土屋さんお願い致します。

<土屋委員>

はい、今、李さんがちょっと博士後期課程のことをおっしゃっていたのですが、たまたま私の両隣に博士を取られた方がいます。今度の2年生は先輩がいないということで、そういう後輩達のためにも他大学の大学院ですけれどもOB、OGとしてそういった研究成果を報告会というのを共催ということでやるということが一つの提案として同窓会としても提案したいと思います。また4月11日以降には国際学部出身の留学生の澤田君もドクターを取る予定ですので、何人か5名ほど今もう既に候補がいますので、今そういうことも先生方は頭の中に入れていただいて大いに活用していただければと思います。それから今年研究科設立10周年ということですので、これはできるかどうか分からないのですけれども、一応同窓会としても毎年論文要旨を修了する時に名簿の確保と同時に電子データで提出していただいています。これはなかなか集まる状況が悪くて記念誌として出すことは今の段階では困難なのですけれども、ある程度先生方の目で優秀論文的なものが何本かあればそういうものを記念誌的に出すなり、国際学叢書として何本か出せるようなものもあれば、また博士前期課程のPR材料になるのではないかなということでご検討いただければというふうに今考えましたので、提案ということでお願いしたいと思います。それと今日は多文化公共圏センターの今後の内容についてはあまり触れられていなかったと思います。いずれにしても博士後期課程の方も将来の出た後の問題についてポストクの問題もあると思うので、個人的にも次年度は博士特別研究員ということで就活にも専念します。そういう状況もありますので、そういった多文化公共圏センターの生かし方というか、利用した場、係わりというのもちょうとご検討いただければということで、三点最後に提言とさせていただきます。

<司会>

はい、ありがとうございました。それでは進藤さん、よろしく申し上げます。

<進藤委員>

学部生のことについて、今日の直接のテーマから少し外れるのですが、教育課程の延長という形で疑義を出してみたいと思います。今まで留学生に対する指導あるいは日本語の能力あるいは私からは就職ということをし上げたのですけれども、日本人学生の留学の場合について、若干私の方からクレームを申し上げたいと思います。選考基準がどうなっているのかということについては個人的に疑義を持っております。というのは、これはずばり名前を出してしまいますと、パラ

ツキー大学への留学生の中でとんでもない日本人の学生が向こうに行っている。これはどうしてそういう人が選ばれて、しかも文科省の奨学金をもらっている、とんでもないことです。これは私だけの感想ではなくて、向こうにおられるチェコ人の学生からそういうことを聞いています。やはりこれは問題があるのではないかというふうに思います。それが一つとですね、それに関連して留学した先で、テレビ等による指導ということも可能ではあるとどこかで採用されていましたけれども、そういうことも含めて、留学の途中でチェックするなりレポートを出させるなり、やはり野放しは良くないのではないかというのが私の疑義でございます。これは、実は宇大からの留学生に限らずです。もう一つ私が情報を持っていますのは、学習院女子大学というのはパラツキー大学と最初に交換留学の制度を持った大学ですが、宇都宮大学は第二番目で、現在2校しかありません。実はその学習院女子大学の留学生センターの方が、パラツキー大学に行った先で、これは女子学生だけに限定されていますが、何も勉強していないと。たまたま私が昔体験した時もそうだったのですけれど、今もってこれはつい最近の情報ですけれども、そういうことを言っておられました。一応、学習院女子大の日本人学生が、評判が悪いと言っているのです。従って、学習院女子大学でパラツキー大学へ派遣する場合は、厳密に査定しますと言うのです。直々にその留学生センターのご担当の方がおっしゃっていましたので、これはパラツキー大学だけであればよろしいのですけれども、これだけ数が留学提携先が増えてきますと、中にはそういう質的な問題、それから成果の問題、行く前と戻ってきた後、どの程度その学生が伸びたのか伸びなかったのか、これはやはりチェックする必要はあるのではないかということをお願いして終わりとします。

<司会>

ありがとうございます。まだ更に言い残したことがございますか。特にございませんか。では研究科長の方から。

<北島学部長>

委員の皆様方のこれまでのご意見、それからご提言を承りました。厚く御礼申し上げます。もちろん御礼してその後何もしないというのでは、申し訳が立ちません。なるべく、全て実行できるかどうかは別として、今のご提言を、実現しなければならぬものとそれから中期計画等に反映させていくものに分ける必要があろうかと思えます。

今のチェックの問題ですが、進藤委員のほうから出された問題はこれは早急に検討しなければならない問題だろうと思うのですが、どういう形でやるべきものなのかちょっと検討する必要があるのかなというふうに、今初めてこういう問題については指摘されたので、今までは割と楽観的ではあったということではございます。

それと、ドクターの方々は今2年まで在学する形になるわけですけれども、その論文の問題と言いましょか、一応先ほど李尚珍委員のほうからもご指摘がございましたけれども、多分ドクターの方はですね、これまではマスターの方もそうだったのですが、マスターの方は共同掲載でやってはいましたけれども、ドクターについては一応今のところドクターだけの論文を刊行するという、論文集を刊行するというところまではまだいっておりません。多分先生方が今出してい

る紀要のほうに掲載をするということではあり得るのではないかと思います。ただし、そのドクター論文を出すということではありませんが。それで先ほどの順序で言うと、突然学会発表をして来なさいと言ってもなかなか大変でしょうから、そこら辺は学内的、研究科内には今年の10月にドクター論文に関するということではありますが、第一次発表というような形で順序を追っていきますので、その場合には多分掲載論文がメインになるのではないかと思います。そういうものを踏まえながら、ちょっと官僚的な答弁になってしまいますが、何とか今のご提案について実現していきたいというふうに考えております。

それから先ほど土屋委員のほうから出された、ここにおられる方につきましても3名の方が既にドクターを取得をしているという、あるいは今後もそうですね、取得したいという方々です。その他先ほど言われましたように複数の方、このお三方を除いても、多くの方が既に1期生以来ドクターをお取りになってきているということですので、私どものほうとの言わばコラボレーションと言うのでしょうか、そういう共同発表というようなことでお互いに刺激しあう場を作るということは非常に重要なのではないかと思います。

それからもう一つ、先ほど進藤さんがおっしゃった留学生の就職指導ですよね。これについては多分、学部とか研究科では限界があるのではないかと思います。というのはプロがいるわけではありません。従って、キャリア就職支援のほうと、言わば企画の充実、タイアップするという形で動かざるを得ないのかなというふうには思っておりますけれども、まあできる限りやれるところはやると。先ほど冒頭に言ったのですが、留学生が多くなってくると、先ほどの日本語の関係もございますので、丁寧に育てていくという、就職でも丁寧に指導をして行くと言いましょか、情報を流すという、そこら辺のところは重要ではないかなというふうに考えております。

従って、ご提言を今後生かす形で何とか運営をしていきたいというふうに考えております。ちょっとやや官僚的な、また私の御礼の言葉になるかもしれませんがよろしくお願い致します。

<司会>

はい、ありがとうございました。司会の不手際でちょっと時間も過ぎてしまったようですが、本日はどうもありがとうございました。色々と活発なご意見・ご指摘、ご丁寧なご提言等をいただきまして、今学部長が申し上げましたように、できるだけこれを実現していく、そして国際学部あるいは大学院のより良い改善・発展に生かして行きたいと思っております。どうもありがとうございました。

それでは、平成19年度の国際学部同窓会有識者懇談会をこれで終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。